中學國文教科書

修正八版

卷七

4a
820
大1

41803
教科書文庫
4
810
41-1912
20000
89886

橋邑

橋岡

修正八版

文部省檢定濟

大正元年十二月廿四日　中學校國語科教科書

中學國文教科書

吉田彌平編

卷七

東京　光風館藏版

資料室

49
820
大1

中學 國文教科書 卷七

目次

一 自然の愛……一頁
二 花の色（短歌）……七
三 雨の興……松平樂翁 八
四 修善寺便り（候文）……尾崎紅葉 一三
五 先進遺響……渡邊國武 一七
六 聖駕ノ凱旋ヲ賀シ奉ル表……近衛篤麿 一九
七 熊野落……三三
八 吉野宮……北畠親房 三一

広島大学 教 89886 図書

九　かけはしの記……正岡子規　三六
一〇　仰臥三年ニ題ス……森鷗外　四二
一一　芳流閣その一……瀧澤馬琴　四三
一二　芳流閣その二……瀧澤馬琴　四七
一三　佐渡が島（口語文）……尾崎紅葉　五一
一四　音樂……五七
一五　十八樓の記……松尾芭蕉　六三
一六　田中の里（短歌）……六四
一七　百花譜……大町桂月　六五
一八　鎭西八郎爲朝その一……六九
一九　鎭西八郎爲朝その二……七四

二〇　武將の連歌
衣のたて……橘成季　七八
弓張月……八〇
二一　事務の才幹……島田三郎　八一
二二　妹にさとす（候文）……吉田松陰　九二
二三　第一等の人……幸田露伴　一〇二
二四　はぎ（狂歌）……一〇七
二五　南清の風景……內藤湖南　一〇九
二六　國民の抱負……大西祝　一一三

風土（地味氣候）
豐饒（ゆたか）
優美（やさしくしとやかなこと）
溫雅（溫和でやさしいこと）
瞼上……まぶたの上に愛を含むもの
愛日（愛のもつるまつ）
自然の情（天然の情愛）
瞼（まぶた）
緣日（神佛の祭典の日）

中學

國文教科書卷七

一　自然の愛

慈愛なる母の懷に養はれたる子は、生涯其の恩愛を忘れず。日本の風土は國民の慈母なり。地味豐饒にして河海に魚貝の利多く、生活をして自由ならしむるが上に、優美溫雅なる山川は常に瞼上に愛を湛ふるが如し。接する者はこれに親しみ、親しむ者はこれを慕ふ。愛に迎へらるゝ者は愛を酬いざるを得ず。天然の大公園に棲む我が國民が其の一木一草をなつかしむは自然の情なるべし。都會の緣日

に張りたる夜店には食品・玩具などの多かる中に、露を帶びたる植木の葉の翠、花の紅こそカンテラの光に映えてみづみづしく鮮かなるを、中流以下の市民はあれこれと買ひ求めて、座敷に飾り、庭に植込む。裏長屋の道具の据所もなき窗前にも稗蒔作りて田舍の景色の面影を偲び、破れ鉢に唐芋を育てゝやさしき野趣を嬉しむ。長火鉢の脇の福壽草は鏡餅に對して暖かげに、軒端に吊りたる忍草は風鈴の音と共に涼し。上下貴賤を通じて自然を愛することかくの如きは他の國民に其の匹ありや。

我が國民は母の慈愛をのみ享けて父の威嚴を知らず。自然の愛すべきを見て畏るべきを思はず。野をも垣をも吹き亂す二百十日の風も野分の名にやさしく、峯も谷も一つに埋みてすさまじき冬の山里も深雪といへばみやびやかなり。「荒き猪もふすゐの牀と稱ふるにやさしく聞ゆ。」などなり。雨といへば照り續きたる夏などは嬉しけれど、一日の降も十日の照より飽きくするに、卯の花くたし・時雨など何れも趣ありて感ぜらる。

自然の愛はかくして表はるゝのみならず、其の名を借りて屢〻人事に用ふ。文學には源氏物語の卷の名に夕顏・末摘花・葵・榊・朝顏・胡蝶・螢・常夏・藤袴・若菜・柏木・鈴蟲・紅梅等あり。菓子に鶯餅・櫻餅・柏餅・萩の餅・紅梅燒・時雨など枚擧するに遑あら

ず。今の刻煙草の名にも福壽草・白梅・皐月・あやめ・萩・紅葉等あり。古く獸肉を紅葉といひ、金貨を山吹に譬へたるもやさしからずや。

我が國民は自然を愛賞する餘、又よくこれを尊重せり。尊重するものには悅んで服從す。彼等は漫りに人工の手を加へずして、自然の儘に自然を仰ぐ。此の服從を以て屈伏といふ勿れ。悅服は自動的なり、屈伏は他動的なり。屈伏するものは不平なる奴隸が氣儘なる主人に對するが如く、悅服するものは從順なる兒孫が寬大なる家長を見るが如し。任意的なるものは毫も抑壓の念を其の間に感ぜず、他の意を以て喜んで己の意とす。花に對する我等の趣味が

如何に西洋人に異なるかを見よ。薔薇は枝ながら幹ながらの姿の美はしきにあらず、花一輪の色の豔に、香の芳しきなり。櫻は一枝の趣を賞するよりも、峯に渡り川に沿ひて、雲とたなびきたる態の目ざましきなり。花瓶に插す時、西洋人は花ばかりをちぎりて手毬の如くし、日本人は葉も枝も其の儘に願はくはこれに置く朝露をも落さゞらんとす。一は枝を撓めて花輪を作り、花瓣を卓上にふり撒きて歡を助くるに、一は牀上の盆石・盆栽に自然の大景を方寸に寫す。彼は色彩の變化を喜ぶに、此は形態の多趣なるを賞すること、恰も油繪と水墨畫との異なるが如し。同じ菊を見るも彼は色を重んじ、此は形を主とすといふ。西洋の草花のチ

ウリップ・ヒアシンスなど、其の葉に何の趣もなくして其の花の妖豔なるは、寧ろ我等の眼に毒々しと感ぜらる。秋の野の女郎花・尾花、其の花に何の美しきことかある　されど、あるかなきかの黄花を捧げて、なほたよ〳〵と下蔭の蟲の音にもゆらぐ樣、ますほの色はやがて白くほゝけて、露に濡れ風に靡く趣は、我が胸にしみて忘れられず。日本人が花を愛するは其の外形にあらず、賦色にあらずして、其の風情にあり、直ちに自然の懷にわけ入つて、其の眞意を握るにあり。かくしてこそ自然を愛し、自然を尊ぶなれ。自然に親しむことの深きはこれ日本國民の特性なり。（國文學史講話）

藤岡作太郎の著

二　花の色

曙花

高崎正風

春は夜を松はのこしてあらはす山
ひとりぬけゆく花乃色かな。

花宿

太田垣蓮月

宿かさぬ人のなさけを戯なさけとて、
おぼろ月夜乃花のしたぶし。

春雨

小出粲

きじの鳴も遠く記こえて、岡のへの
いほまづかなる春は雨ろ哉。

三 雨の興

松平樂翁

春は雨こそのどかなれ。軒端より霞みわたりて、いと濃かに降れるが、衣濕せども、降るとは見えず、軒の玉水も閒遠に音して、棲み捨てし蜘蛛のいに玉ぬくけしき、庭の面の枯生の牀に綠やゝそひゆくも、柳の絲の動きもやらで露そふも、共にいとのどかなり。燈挑げても何となく光しめりたるに、鐘の音のほのかに響き來るも、心澄み渡りぬるものぞかし。そのほか梅が香のしめり、夜深く匂ひわたるも、花にうしとかこちぬるも、あはれはありけり。

春も老いゆく頃蛙の時得顏に鳴くもをかし。時鳥の初音いかにと思ふ頃、村雨のはら〳〵と降り出でたるも、五月雨

のいく日もふり暮して、書の卷々くり返しつゝ居たれば、何となく世の中の事にも遠ざかりぬる心地ぞする。また暑さに堪へかぬる頃、雲の漲り出づる勢ありて、風ひとしきり吹き落ちたるに、柳・蓮なんどの、葉裏白く見せたるも涼し。やがて大きやかなる雨の閒遠に落ちたるが、後には頻に降りきて、物音も聞えず、土の匂ひ來るもいと心地よし。

松平樂翁

軒端は玉の簾かけたらんやうに、玉水の絶閒なく落ちたるに、庭は一つ湖となりて、あるは瀧おとし又は水はしらせた

るに、人々しばしものいはで、うち守りゐたるもをかし。やや雲淡くなれば、池の面にには數ふるばかり雨見えて、小鳥など庭へをどり出でて餌ひろふさまなり。はじめ雲立ち出でし方は、はや空の一しほ綠に見えて、虹なども見ゆるに、木の綠の庭潦に影見ゆるもいと涼し。老いたる女など、かみの音に驚きてはひ出でたるが、「けふのはわかゝりし時のごと、よく霽れにけり、今時のはかく霽るゝこと稀なり。」など、はや繰言いふもあり。「彼はかくあわてし。」などいひて、かたみに笑ひどよみつゝ、「けふは蚊も少なかるべし、かみの音もいとかすかなり、此の頃の暑さも忘れぬ。」とて、端近う出づれば、夕月の光さしわたりて、草木の露も玉なすに、肥えふくれたる蛙の、物待顔に空うちにらみて、ふつゝかなる音に鳴くもをかし。

秋來る頃の雨は、きのふにかはりて何となう淋し。荻の上風、外山の鹿の音なんど、月よりも身にしむ心地ぞする。常に聞き馴れし筧の水の音までも、あはれふかくこそ。月の前の村雨も亦をかし。まいて、やゝ夜寒の頃鳴きからしたる蟲の音の雨のをやみにかすかなる聲して、枕近く鳴きよるもあはれなり。この雨に木々もそめなんと思へば、草なども生ひ出でなん、栗もはや落つべしなど、童のもの淋しげに、燈火に向ひつゝ言ひ出づるも、げに樣々なり。夜深き鐘の音のうちしめるものから、さすがに秋は聲冴えて聞ゆる

に、鐘つく人の心をもあはれと思ふばかり、感情はいと深かりけり。　紅葉の染めそふも、白菊のうつりゆきて、ひとさかり見するも、尾花の露重げにうちしをれたるに、龍膽のうらみ深く咲きたるあたりも、つき〴〵し。　朝顔の皆枯れたる中に、さゝやかに赤う咲き出でたるが晝過ぐるまでも萎みかくれたる、またあはれなり。　野分の風はおどろおどろしきものから、雨は夕立におとらざれど、さすがにあはれをそふるは、秋の習なるべし。　時雨のさとおとして、夕日に白く降りくるも、また音かへて枕とふもをかし。（花月草紙）

四　修善寺便り

尾崎紅葉

再啓。　昨日は雨の日暮し無聊に困しみ、夕景始めて傘撃して川向の小山なる頼家公の墓を拜し申候。　時政爺の邪慳何ぞ今に執著して假さゞることかくの如きやと見るもいたはしの荒涼たる藪蔭に空しく一片の殘石を留めて、惨禍を生前に極め、恥辱を末代に曝され候事、御身一たび征夷大將軍の顯榮にも居たまひつる御運を以てして如何なる前世の御宿業にやまし〳〵けんと低回去るに忍びかね候。

墓畔に尼將軍建立の一切經堂あり、是こそ公の奥津城にして、現在の五輪塔は後人の御墳無きを慨きて假に建てたるものなりとの考證これあり候。　されば右の

丈六佛（佛）
朽廢（すたれんさる）
わかしをお（わかしをおもんぱかる）
ずおもう涙の止められん（敛）
直（ただちに）
閉居　剩へて（上）
徹夜（夜中）
熟睡（眠る）
玲瓏玉の如く（ひかなまことかたまのごとくなり）
踊躍（おどりあがる）
撮影（寫眞を）
逸（當惑）
應急（早速の）
やをら（漸く）

（一）源範頼。蒲冠者（ガマノカムリノ者）

（二）桂川の川中に涌き出づ。

經堂の大破、安置せる丈六佛の朽廢、亦決して懷古の暗涙を敛めしむべきにあらず候。（一）蒲冠者の墳は未だ弔はず、直、鄰に候へども修禪寺にも參詣致さず候。追つて一見の上申上ぐべく候。

此の日は一日閉居の餘り入浴七度に及び、剩へ連夜の按摩尤も勁く全身綿の如く相成り、疲勞度に過ぎて徹夜眠る能はず、黎明始めて交睫して覺えず十一時に至り候處、快晴の天氣玲瓏玉の如く、踊躍して獨（二）鉆の湯の撮影を試みんと逸り候程に、過りて三脚柱の腰部をへしをり尠なからず當惑致候へども、應急の手術を施し、やをら湯の上流の淺瀨に蹈み入り、ピント合せ候がひ

頻々（しきりに）
然る（あるべき）
（やうにならざる）
難澀（つらさ）
印畫（うつり）
心元無く（不安の）
廣機
中段（中腹）
崖下（がけ）
餘儀なく（あたはず）
倥偬（いそがしい）
速寫機（はやとり寫眞）
拈ル
修業・麤筆（麤筆の）
揮ふ（書き）
（つまらない）

まとり候程に水中の赤脚寒に堪へず、而も來浴者頻々として然るべからざる處に長き布を翻し、或は目障の邊に著物を脱ぎ放しなど致し、始終ピント安を妨害致され、技師の難澀これに過ぎず候ひき。辛うじて一照致候へども印畫の安否甚だ心元無く存候。

それより去りて川下なる廣機の瀧に赴き、馬車屋の前なる阪道の中段に機械を立て候處、崖下の「馬の湯」に上下する四足の往來ありて屢、これに道を讓るべく餘儀無くせらるゝため、倥偬の間に速寫機を拈りて立退き申候。

此の寫眞修行の前、人の需に依りて少々麤筆を揮ひ申

候。然るに僻境の惡箋用ふべからずなど不足を申候處、亭主の才覺、紙門に貼り殘しの地紙裁ちて持ち來り候に、居然たる檀紙金砂子の好短冊を得候こそ風流この上なく感心致候へ。

二日の雨にて椎茸出來候へば味淋醬油の附燒に致候。今は春子のすがれにて、肉薄く、氣も亦微には候へども、山廚の佳味侮るべからず、平椀中、常に幅する所の陣笠の如き物とは箸を同じうして論ずべきにあらず候。

本日は食福の日にて、午後には合宿の衆より炒豆・草餅を貰ひ、夜に入りて靜霞子より新杵の一折を贈られ候。胃病の人每に餓鬼の如し。幸に食談の煩を咎め給ふ

僻境（ヒキヤウ）　惡箋（アクセン）　才覺（サイカク）　紙門（シヤウジ）　居然（キヨネン）　檀紙（ダンシ）　金砂子（キンスナゴ）　椎茸（シイタケ）　春子（ハルコ）　山廚（ヤマ）　幅する（ハバ）　食福（ショクフク）　新杵（シンキ）

なかれ。草々不盡。（草紅葉）

五　先進遺響

渡邊國武

南洲先生、居常人を教へて曰く、「人を相手にせず、天を相手にせよ。」又曰く、「命もいらず、名もいらず、官位も金もいらぬ人は始末に困るものなり。この始末に困る人ならでは、艱難を俱にして國家の大業は成し得られぬなり。」又曰く、「政の大體は文を興し、武を振ひ、農を勵まし、三つに在り。其の他、百般の事は皆此の三つのものを助くる具なり。」と。嗚呼此の大道學・大經濟、直ちにこれを實行すれば、其の人は則ち英雄・豪傑、其の國は則ち富强充實。簡にして盡せりと謂ふべ

居常（キヨジヤウ）　艱難（カンナン）　具（グ）　充實（ジユウジツ）

し。

小楠先生偶作の二首あり。曰く、「帝生萬物靈、使之亮天功。所以志趣大、神飛六合中。」又曰く、「道既無形體、心何有拘泥。達人能明了、渾順天地勢。」と。第一首は把捉し來つて好し。以て先生の大節を見るに足る。第二首は放縱し得て妙なり。以て先生の大略を知るべし。

横井小楠（小楠遺稿）

象山先生嘗て曰く、「日晷一移、千歳無再來之今、形神既離、萬古無再生之我。學問事業豈可悠々。」と。以て其の半生の勤敏を見るべし。先生又漫述の二首あり。曰く、「雨風月如晦、頑犬吠成羣。是亦尋常事、利害何足言。」と。又曰く、「謗者任汝謗、嗤者任汝嗤。天公本知我、不覓他人知。」と。以て其の半生の抱負を見るべし。先生は學術・經濟倶に一世の雄なり。

横井小楠筆蹟（小楠遺稿）

（機外觀）

六　聖駕ノ凱旋ヲ賀シ奉ル表

近衛篤麿

學習院長公爵臣近衛篤麿院ノ職員九十三人ニ代リテ謹ミテ奏ス。

天皇陛下允文允武ノ資ヲ以テ夙ニ列聖ノ洪緒ヲ纘ギ、大イニ中興ノ偉業ヲ建テサセタマヒ、羣品各々時雨ノ化ニ霑ヒ、萬民皆天日ノ光ヲ仰グ。*明治二十七年。 *嚮ニ韓廷政ヲ失フニ當リ、清國忽チ盟ヲ渝ヘ、屬邦ノ難ヲ拯フヲ名トシテ東洋ノ平和ヲ破リシカバ、陛下震怒シテ遂ニ討清ノ軍ヲ起サセラレ、大本營ヲ廣島ニ進メサセタマヒ、供御ヲ損シ、飲膳ヲ減ジ、宵衣旰食シテ親シク陸海ノ軍事ヲ統ベサセタマヘリ。サレバ百僚有司ノ事ニ與レルモノ、兩院議員ノ議ニ參セルモノ、將校兵士ノ軍ニ從ヘルモノ、皆陛下ノ大御心ヲ心トシテ奔走經營シ、以テ皇謨ヲ贊襄シ奉ランコトヲ期セザルハナカリキ。此ヲ以テ皇軍ノ海ヲ渡リテ進ミシヨリ未ダ一歳ニ滿タザルニ、奉天・山東ヲ占領シ、臺灣・澎湖ヲ震動シ、降ル者ハ納レ、懷ク者ハ撫シテ恩威竝ビ行ハレシカバ、旭旗ノ向フ所ニハ草木皆靡キ、天兵ノ至ル所ニハ雞犬モ驚クコトナカリキ。清廷茲ニ渝盟ヲ悔イ、地ヲ獻ジ、幣ヲ納レ、遂ニ媾和ノ條約ヲ訂シテ善鄰ノ舊誼ヲ復スルニ至レリ。日出ヅル所ノ國、版圖益〻廣マリテ光華六合ニ徧ク、現御神ノ君、明德愈〻遠クシテ威稜五洲ノ外ニ振ヘリ。

伏シテ惟ミルニ、伊弉諾尊・伊弉册尊天瓊矛ヲ執リテ大八洲

國ヲ畫キ成シ給ヒ、天祖天照大神寶劍ヲ傳ヘテ天日嗣ノ神靈トナシタマヒシヨリ列聖相承ケテ益〻國威ヲ張リ、或ハ三韓ヲ服シテ藩トシ、或ハ肅愼ヲ平ゲテ貢ヲ徵シタマヒ、細矛千足ノ名夙ニ四方ニ著レタリト雖モ、天業ノ恢弘セルコト今日ノ如キハ千古ニ亙リテ未ダ有ラザル所ナリ。此ノ盛時ニ遭ヒマツレル臣民イカデカ進ミテ報效ヲ圖ラザルベキ。臣等職ヲ學習院ニ奉ジ、養フ所ハ華冑ノ子弟、皇家ノ藩屏ナリ、敎フル所ハ忠孝ノ道義、文武ノ學藝ナリ。今ヨリ後愈〻益〻平生ノ丹誠ヲ竭シ、以テ陛下ノ盛德大業ニ副ヒ奉ランコトヲ希フ。今ヤ聖駕ノ還幸ニ際シテ歡喜ノ至リニ勝ヘズ。謹ミテ表ヲ捧ゲテ以聞ス。

七　熊野落

大塔宮二品親王は笠置の城の安否を聞召されんために、暫く南都の般若寺に忍びて御座ありけるが、笠置の城已に落ちて主上囚はれさせたまひぬと聞えしかば、虎の尾を履む恐御身の上に迫りて、天地廣しといへども御身を隱さるべき所なし、日月明かなりといへども長夜に迷へるこゝちして、晝は野原の草に隱れて、露に臥す鶉の牀に御涙を爭ひ、夜は孤村の辻にイみて、人を咎むる里の犬に御心を惱まされ、いづくとても御心安かるべき處なかりければ、かくても暫しはとおぼしめされける處に、一乘院の候人按察法眼好專、

(一) 虎尾。不レ履人。虎ノ尾ヲ履ム。
(二) 奈良興福寺の寺務門跡。

如何して聞きたりけん、五百餘騎を率ゐて未明に般若寺へぞ寄せたりける。

折節、宮につき奉りたる人一人もなかりければ、一防ぎ防ぎて落ちさせたまふべき樣もなかりける上、透間もなく兵已に寺内に打入りたれば、紛れて御出あるべきかたもなし。

「さらばよし、自害せん。」とおぼしめして、既におしはだ脱がせたまひたりけるが、「事叶はざらん期に臨んで腹を切らん事は、いと易かるべし。若しや。」と、「隱れて見ばや。」とおぼしめし返して、佛殿の方を御覽ずるに、人の讀みかけて置きたる大般若の唐櫃三つあり、二つの櫃は未だ蓋をあけず、一つの櫃は御經を半ばすぎ取り出して、蓋をもせざりけり。此の

*大般若經六百卷、唐の玄奘三藏譯す

蓋を明けたる櫃の中へ御身を縮めて臥させ給ひ、其の上に御經をひきかづきて、隱形の呪を御心の中に唱へてぞおはしける。若し搜し出されなば、やがて突き立てんと思召して冰の如くなる刃を拔いて御腹にさし當て、兵「こゝにこそ。」といはんずる一言を待たせ給ひける御心の中、推し量るも尙淺かるべし。

さるほどに、兵佛殿に亂れ入りて、佛壇の下、天井の上までも殘る處なく搜しけるが、餘りに求めかねて、「是體の物こそ怪しけれ。あの大般若の櫃をあけて見よ。」とて、蓋したる櫃二つを開けて御經を取り出し、底を翻して見けれどもおはせず。「蓋開けたる櫃は見るまでもなし。」とて、兵皆寺中を出で

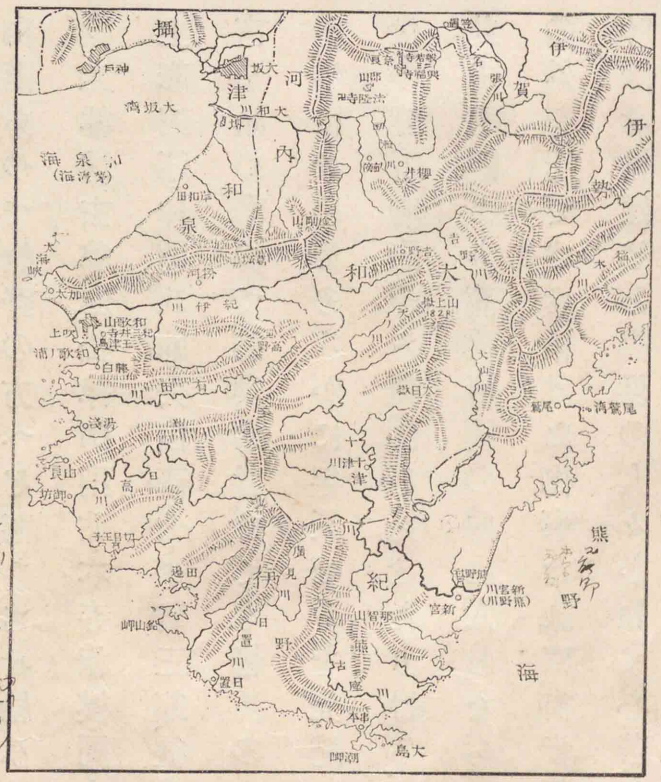
去りぬ。宮は不思議の御命を續かせ給ひ、夢に道行くこゝちして櫃の中におはしけるが、若し又兵の立歸り委しく搜す事もやあらんずらんと御思案ありて、やがて前に兵の搜し見たりつる櫃に入りかはらせたまひてぞおはしける。案の如く兵どもまた佛殿に立歸り、「前の蓋の開きたるを見ざりつるが覺束なし。」とて御經を皆打移して見けるが、からからと打笑うて、「大般若の櫃の中をよく〳〵搜したれば、大塔宮はいらせ給はで、*大唐の玄弉三藏こそおはしけれ。」と戲れければ、兵皆一同に笑ひて門へぞ出でにける。「是、偏に摩利支天の冥應、又は十六善神の擁護による命なり。」と、信心肝に銘じ、感涙御袖を沾せり。

*唐の人。天竺諸國を歷遊すること十三年。歸來佛典を譯す。

かくては南都邊の御隱れがも叶ひ難ければ、卽ち般若寺を御出あつて熊野の方へぞ落ちさせ給ひける。御供の衆には、光林坊玄尊・赤松律師則祐・木寺相模・岡本三河房・武藏房・村上彥四郎・片岡八郎・矢田彥七・平賀三郎、彼是以上九人なり。宮を始め奉つて、御供の者までも、皆柿の衣に笈を掛け、頭巾眉半にせめ、そのなかに年長ぜるを先達に作り立て、田舍山伏の熊野參詣する體にぞ見せたりける。

此の君固より龍樓鳳闕の內に人とならせ給ひて、華軒香車の外を出でさせ給はぬ御事なれば、御步行の長途は定めて叶はせ給はじと、御供の人々かねて心苦しく思ひけるに、案に相違して、いつ習はせ給ひたる御事ならねども、怪しげな

る單皮・脚半・草鞋をめして、少しも草臥れたる御氣色もなく、社々の奉幣、宿々の御勤懈らせ給はざりければ、路次に行きあひける道者も勤修を積める先達も、見尤むることなかりけり。



せば、沖漕ぐ舟の楫をたえ、浦の濱ゆふ幾重とも知らぬ浪路に鳴く千鳥、紀の路の遠山渺々と、薄紫や藤代の松にかゝれる磯の浪、和歌・吹上をよそに見て、月にみがける玉津島、光もふくめる孤*村の樹、夕を送る遠寺の鐘、あはれを催す時しも今はさらでだに長汀曲浦の旅の路、心を砕く習なるに、雨を帶夕陽。

*孤村樹色昏ニ残雨。遠寺鐘聲

あれ、切目の王子に著き給ふ。

其の夜は叢祠の露に御袖を片敷いて、夜もすがら祈り申させ給ひけり。丹誠無二の御勤、感應などかあらざらんと神慮も暗に測られたり。終夜の禮拜に御窮屈ありければ、御肱を曲げて枕として、暫く御まどろみありける御夢に、鬟結うたる童子一人來て、「熊野三山の間は、尚も人の心不和にして大義なり難し。是より十津川の方へ御渡り候ひて、時の

至らんを御待ち候へかし。兩所權現より案内者に附け進らせられて候へば、御道指南仕るべく候。」と申すと御覽ぜられて、御夢はすなはち覺めにけり。是、權現の御告なりけりと憑しくおぼしめされければ、未明に御よろこびの奉幣を捧げ、やがて十津川を尋ねて分け入らせ給ひける。

其の道のほど三十里が間には、絶えて人里もなかりければ或は高峯の雲に枕を欹てゝ、苔の莚に袖を敷き、或は岩漏る水に渴を忍んで、朽ちたる橋に肝を消す。山路*もとより雨なくして空翠常に衣を濕す。見上ぐれば萬仞の青壁劍に削り、見おろせば千丈の碧潭藍に染めり。數日の間かゝる嶮難を經させたまへば、御身も草臥れ果てゝ流るゝ汗水の

*山路元無雨、空翠濕人衣。

如く、御足缺け損じて、草鞋皆血に染まれり。御供の人々も、皆其の身鐵石にあらざれば、皆飢ゑ疲れてはか〴〵しくも歩み得ざりけれども、御腰を推し、御手を挽いて、路のほど十三日に十津川へぞ著かせたまひける。（太平記）

八　吉野宮

北畠親房

又の年戊寅の春二月、鎭守府大將軍顯家卿、また親王(二)を先立て申し、重ねてうち上る。海道の國々悉く平ぎぬ。伊勢・伊賀を經て大和に入り、奈良の京になん著きにける。それより處々の合戰あまたゝび互に勝負ありしに、同じき五月、和泉の國にての戰に、時や至らざりけん、忠孝の道こゝに極り

(一) 延元三年。
(二) 義良親王。

にき。苔の下にも埋れぬ物とては、たゞ徒らに名をのみぞ留めし。心憂き世にもあるかな。官軍なほ心を勵まして、男山に陣を取りて暫く合戰ありしかど、朝敵忍びて社壇を燒き拂ひしより、事成らずして引き退く。北國に在りし義貞も度々召されしかど上りあへず、させる事なくて空しくさへなりぬと聞えしかば、いふばかりなし。

さてしも止むべきならずとて、陸奥の皇子又東へ向はしめたまふべき定めあり。左少將顯信朝臣中將に轉じ、從三位に敍せられ、陸奥介鎭守府將軍を兼ねて遣はさる。東國の官軍悉く彼の節度に從ふべき由を仰せらる。親王は儲の君に立たせたまふべき旨申し聞かせたまふ。

(一) 越前。
(二) 義良親王。
(三) 顯家の弟。

七月の末つ方伊勢に越えさせたまひて、神宮に事の由を啓して御船の艤ひし、九月の初、纜を解かれしに、十日あまりの事にや、上總の地近くより、空の氣色おどろ〳〵しく海上あらくなりしかば、又伊豆の崎といふ方に漂はれしに、いとゞ波風夥しくなりて、あまたの船行方知らずありけるに、皇子の御船は障りなく伊勢の海に著かせ給ふ。顯信朝臣は元より御船に候ひけり。同じ風のまぎれに東を指して、常陸の國なる内の海に著きたる船ありき。方々に漂ひし中に、この二つの舟同じ風にて東西に吹き分けらる。末の世には珍らかなる例にぞあるべき。儲の君に定まらせ給ひて、例なき鄙の御住居も如何と覺えしに、皇太神のとゞめ申さ

しめ給ひけるなるべし。後に吉野に入らせまし〳〵て、御目の前にて天位を嗣がせ給ひしかば、いとゞ思ひ合せられて尊くもあるかな。又常陸は元より志す方なれば、御志ある輩相計らひて義兵こはくなりぬ。

さても舊都には、戊寅の年の冬改元して曆應とぞいひける。吉野の宮にはもとの延元の號なれば、國々も思ひ〳〵の年號なり。唐土にはかゝる例多かれど、此の國には例なし、されど四年にもなりぬるにや。大日本島根は元より皇都なり。内侍所・神璽も吉野におはしませば、いづくか都にあらざるべき。

さても八月の十日餘り六日にや、秋霧に冒されさせ給ひて

後村上天皇。

光明天皇。

かくれまし〳〵ぬとぞ聞えし。ぬるが中なる夢の世は今にはじめぬ習とは知りながら、つく〴〵目の前なる心地して、老の涙も乾きあへねば、筆の跡さへ滯りぬ。むかし仲尼は獲麟に筆を絶つとあれば、こゝにて止りたけれど、神皇正統の邪なるまじきことわりを申し述べて素意の末をもあらはさまほしくて、強ひて記しつくるなり。かねて時をも悟らしめたまひけるにや、前の夜より親王をば左大臣の第に移し奉られて三種の神器を傳へ申さる。後の號をば仰のまゝにて後醍醐天皇と申す。天下を治めたまふこと二十一年、五十二歲おまし〳〵き。

昔、仲哀天皇熊襲を攻めさせたまひし時、行宮にて神ざりま

孔子春秋を筆削し筆を獲麟に絶つ。

關白左大臣藤原經忠。

しましき。　されど神功皇后程なく三韓を平げ、諸皇子の亂を鎭められて、胎中天皇(一)の御代に定まりき。　この君聖運ましまししかば、百七十餘年中絶えにし一統の天下を知らせたまひて、御目の前にて日嗣を定めさせたまひぬ。　功もなく德もなき盜人世に起りて四年あまりが程宸襟を惱まし、御世をすぐさせたまひぬれば、御怨念の末空しくありなんや。　今の帝(二)亦天照大神よりこの方の正統を受けまし〱ぬれば、この御光に爭ひ奉る者やはあるべき。　なか〱かくて靜まるべき時の運とぞ覺ゆる。（神皇正統記）

(一)應神天皇。
(二)後村上天皇。

九　かけはしの記

正岡子規

浮世の病、頭に上りては哲學の研究も惑病同原の理を示さず行脚・雲水の望に心空になりては、俗界の草根・木皮、畫にかきたる白雲・青山ほどにきかぬもあさまし。　腰を屈めての辛苦艱難も、世を逃れての自由氣儘も、固より同じ煩惱の意馬心猿と、知らぬが佛の御力を杖に頼みてよろ〱と、病の足もと覺束なく、草鞋の紐も結びあへず、いそぎ都を立出てぬ。

上野より汽車にて横川*に行く。　馬車、笛吹嶺を越ゆ。　鳥の聲耳もとに落ちて、見上ぐれば千仞の絶壁、百尺の老樹、聳え聳えて天も高からず、樵夫の歌足もとに起つて、見おろせば蔦かづらを傳ひて渡るべき谷間に、腥き風さつと吹きとよ

*上野國碓氷郡。

めきて、萬山自ら震動す。遙かに來し方を見かへるに、山又山、峨々として路いづくにかある、寸人豆馬のみぞ、かれかと許り疑はれて、

（つゞら折）幾重の峯をこさりきて、
雲間よひく紀山を空の里。

日もやゝ暮れかゝれば、四方濛々として山とも知らず、海とも知らず。かけ上る駒の蹄に蹈み散らす雲霧のあはひを見れば、一歩の外は削りたてたる嶮崖の底もかすかにていとおそろし。登れども登れども極る處を知らず。山ますます高く、雲いよ〳〵低し。

見あぐまぢ信濃まつゞく若葉かな。

輕井澤はさすがに夏猶寒く、透間もる淺間おろしに、一重の旅衣見果てぬ夢を護るに難かり。例ならず疾く起き出て窗を開けば、幾重の山嶺屏風を遶らして、草のみ生ひ茂りたれば、其の色染めたらんよりも麗し。

山々も萌黃・淺黃や、ほとゝぎす。

淺間は雲に隱れて、煙もいづこに立迷ふらんと思はる。汽車を驅りて善光寺に詣で、又川中島を過ぎて篠井まで立戻る。古戰場はいづくの程とも知らねど、山と山とに圍まれて、犀川の迴るあたりにやあらん。河の水はいたく痩せて、ほとりの麥畠空しく赤らみたり。

日はくまぬ、雨はぬり紀ぬ、旅衣、

次の日雨晴る。路々立てる芭蕉塚に興を催して辿り行けば、行くてはるかに山重なれり。野の狹うとがりて次第次第にはひる山路けはしく、弱足にのぼる馬場嶺、さても苦しやと休む足もとに、誰が栽ゑしか、珊瑚なす覆盆子、旅人も採らねばや、こぼるゝばかりなり。少し上りて、とある樹陰の葭簀茶室に憩へば、主婦のもてなしぶり、谷水を四五町の麓に汲みて、もてくる汗の滴り、情を汲む一口に浮世の腸は洗はれたり。一*樹の陰一河の流とや、ひじりの教も時にあうてこそ有り難けれ。

此の夜は亂橋といふあやしの小村に足を留む。鄰室の雜談に夢さまされて、つとめてこゝを立出づれば、はや爪先あがりの立峠、旅の若衆と見て取つて、馬子が馬に乘れとの勸め有りがたく、乘つて見れば旅ほど氣樂なるものはなし。昨日の馬場峠はなにとて苦しみし。路の邊に咲く白き花を何ぞと問へば、これなんうつ木と申すといふ。いとうれしくて、

むら消えし山ぢ白雪來て見るべ、
駒の蹄が氾にゆらぐ卯の花。

峠にて馬を下る。鶯の時ならぬ音に驚かされて、

鶯や、野を見お過せば早苗とぞ。（子規隨筆）

*或處ニ一村、宿ニ一樹下、汲ニ一河流、一夜同宿、皆是先世結緣。

一〇　仰臥三年ニ題ス

森鷗外

「仰臥三年」ハ吾ガ友燕處生ノ作ル所ナリ。燕處生ハ近藤氏、通稱ハ常次郎。曾テ東京醫科大學ニ遊ビテ業ヲ終ヘ、又海外ニ留學シテ譽ヲ馳セタリ。然ルニ、一旦痾ヲ得テ支體痲木シ、一臥三年、面承塵ヲ仰ギ、背牀褥ニ支ヘ、輾轉反側スルコト能ハズ。若夫起坐立行ハ其ノ夢想スル所ニ非ズ。凡ソ是ノ如キ境遇ニ處スル者ハ庸俗無能ナル者ト雖モ將ニ呻吟煩悶スルコトヲ禁ゼザラントス。何ゾ況ヤ有爲ノ資ヲ抱ケル士、逸翰忽チ鍛ガレ、雄心自ラ局スルヲヤ。其ノ悲傷シテ狂セント欲シ、天ヲ怨ミ世ヲ厭ハンコト固ヨリ其ノ所ナラン。獨リ燕處生ハ心ヲ持スルコト恬靜、旦夕書ヲ讀ミ、文ヲ屬シ、病ノ身ニ在ルヲ知ラザルモノヽ如ク、此ノ書ノ說ク所モ亦溫雅平正ニシテ一毫不平ノ音ナシ。中ニ養フ所凡常ニ超絕スルモノニ非ザルヨリハ、恐ラクハ是ノ如キコト能ハザルベシ。抑此ノ書大小ノ人事錯綜敍出シテコレヲ貫穿スルニ一條ノ哲理ヲ以テス。是、作者方寸ノ鍛ヒ成ス所ニシテ、洵ニ測度シ易カラザルモノアリ。披讀セン者ソレ潛心推究セヨ。（仰臥三年）

一一　芳流閣　その一

瀧澤馬琴

古の人謂はずや、「禍福は糾ふ纆の如し。」人間萬事往くとして塞翁が馬ならぬはなし。こは福の倚る所はた禍の伏す

(一) 禍之與レ福何異ニ糾纆一。
(二) 禍兮福之所レ倚、福兮禍之所レ伏。命不レ可レ說、誰知ニ其極一。

極（結極）

機會を得て

所、彼にあれば此にありとは思へども、豫てより誰かその極を知らん。憐むべし、犬塚信乃は親の遺言、記念の名刀、心にしめつ、身につけつ、艱苦の中に年を經て、得難き時を得てしかばはる〳〵古河へ齎して名を揚げ、家を興すべかりしその福は禍とふりかはりたる村雨の刀は故の物ならで、わが身を劈く讐とぞなりし。憾をこゝに釋くよしもなく、緓急にして意外にあり。僅に當座の辱を避けばやと思ふばかりに、夥多の圍を切り開きて、芳流閣の屋の上に登れども、左右に脱れ去るべき道のなければ、其處に必死を窮めたる心の中はいかなりけん。想ひやるだにいと痛まし。

されば又犬飼見八信道は犯せる罪のあらずして、月來獄舍

ナヤミに（苦理）

辭（ことば）、尚言ふ

飢蒸（飢熱）（あつき）

に繫がれし禍は今恩赦の福。我が縛の索解けて、人にぞかかる捕手の役義。犬塚信乃を搦めよとて、怒に擇み出されつ。他の憂を身の面目に、今更用ひられん事願はしからずと思へども、辭みて許さるべくもあらぬ君命重く、彌高き彼の樓閣は三層なり。その二層なる檐の上まで身を霞ませて登りて見れば、足下遠く、雲近く、照る日烈しく、堪へ難き、時は六月二十一日、昨日も今日も乾蒸の餤熱を渡る敷瓦は凸凹隙なく波濤に似て、下には大河滔々たるこゝ生死の海に朝る、流は名に負ふ阪東太郎、水際の小舟楫を絶え、進退既に谷りし敵にしあれば、いかでわれ繫ぎ留めんと鼈の樹傳ふ如くさら〳〵と登り果てたる三層の屋根にはまぶしさす

よしもなく、かたみに隙を窺ひつゝ、疾視へあうて立つたる有様、浮圖の上なる鶴の巣を巨蛇の狙ふに似たりけり。

廣庭には成氏朝臣・横堀史在村等の老黨若黨圍繞せし牀几に尻をうち掛けて、勝負いかにと見上げたり。亦只閣の東西には、腹卷したる許多の士卒、槍・長刀を晃かし、或は箭を負ひ、弓杖突き立て、組んで落ちなば繫ぎ留めんとて、項をそらしてこれを觀る。加之、外のかたは、緜連として杳なる河水遶りて砌を浸せば、「たとひ信乃武事長け、膂力衰へず、よく見八に捷ちたりとも、墨氏が飛鳶を借らざれば、虚空を翔るべくもあらず、魯般が雲梯なければ、地上に下るべくもあらず。渠、鳥ならずも、羅に入りぬ、獸ならずも、狩場に在り。三寸息

(一)古河公方足利成氏。
(二)成氏の老臣。
(三)墨翟、周の人。
(四)魯の人公輸般。

絶ゆれば、縡みな休まん。脱れ果てじ。」と見えたりけり。

(南總里見八犬傳)

一二 芳流閣 その二

瀧澤馬琴

その時、信乃思ふやう、「初層・二層の屋の上まで追ひ登らんとせし兵等を斫り落しつる後は絶えて近づくものなきに、今たゞひとり登り來ぬるはよに覺ある力士ならん。しやつはこれ膳臣巴提便が虎を暴にする勇あるか、又富田三郎が鹿の角を裂きたる力あるか。遮莫一箇の敵なり。引組んで刺しちがへ、死するに難きことやはある。よき敵ござんなれ、目に物見せん」と、血刀を袴の稜もて推し拭ひ、高瀬の如

(一)欽明天皇七年、百濟に使せし時、虎穴に入りて虎を刺し殺す。
(二)和田義盛の士、源實朝の面前にて長三尺方七寸の大鹿角二箇を一度に折る。

棟

てつぺん。とはいふものも。

たあらばず。ちからすぐれず。

よりなはたらき、

き方桙に立つたるまゝに寄するを俟てば、見八も亦思ふやう、「かの犬塚が武藝勇悍素より萬夫不當の敵なり。さりとても搦めかねて他の援を借ることあらば、獄舍の中よりこの役義に擇み出されしかひもなし。搦め捕るとも、擊たるとも、勝負を一時に決せんものを。」と思ひにければ、ちつとも擬議せず、御諚ざふ。」と呼びかけて、拿つたる十手を閃かし、飛ぶが如くに方桙の左の方より進み登りて、組まんとすれど、寄せ附けず。心得たりと鋭き太刀風に擊つをはつしと受け留めて、拂へば透かさずこむ刀尖を支へて流す一上一下、辷る甍を蹈み留めてしきりに進む捕手の祕術、あなたも劣らぬ手練の働、嵩より落す太刀筋をあちこち外す虚々實々、

屋蓑で、

錚然（さうぜん）金聲、風、

青漂潭（あをざらめ）

有移。

寛永通寶まで。

未だ勝負を判かざれば、廣庭なる主從・士卒は手に汗握らざるものなく、瞬きもせず氣を籠めて見るめもいとゞはるかなり。

さる程に、犬塚信乃は侮りがたき見八が武藝に、敵を得たりけりと思へば、勇氣いやまして刀尖より火出づるまで寄せては返す太刀音・かけ聲。兩虎深山に挑むとき、錚然として風起り、二龍青潭に戰ふ時、沛然として雲起るもかくぞある。べき。春ならば峯の霞か、夏ならば夕の虹かと見るばかりなるいと高き閣の棟の上に死を爭ひし爲體、よに未曾有の晴業なれば、見八が被籠の鎖、肱當の端を裏かくまでに切り裂かれしかど、太刀を拔かず。信乃は刀の刃も續かで、初め

に淺痍を負ひしより次第に疼みを覺ゆれども、足場を守りて撓まず、去らず、疊みかけて擊つ太刀を見八右手に受け流して、かへす拳につけ入りつゝ、やつとかけたる聲と共に眉間を望みて磴と打つ十手を丁と受け留むる信乃が刃は鍔際より折れて遙かに飛び失せつ。見八得たりと組むを、そがまゝ左手に引き著けて、かたみに利腕しかと拿り、捩ぢ倒さんと曳聲合して、揉みつ揉まるゝ力足、これかれ齊しく蹈み辷らして河邊の方へころ〳〵と身を輾ばせし覆車の米苞、阪より落すに異ならず。勾配けはしき棧閣に削り成したる甍の勢、とゞまるべくもあらざめれど、かたみに拿つた る掌を緩めず、幾十尋なる屋の上より末遙かなる河水の底には入らで、程もよし、水際に繫げる小舟の中へうち累なりつゝどうと落つれば、傾く舷と立つ浪にざんぶと音す水煙、纜ちやうと張り切つて射る矢の如き早河の直中へ吐き出されつ。しかも追風とひく潮に誘ふ水なる下り舟、往方も知らずなりにけり。（南總里見八犬傳）

（明治三十年七月三日。越後國春日新田驛。）

一三　佐渡が島

尾崎紅葉

九時三十五分に、こゝを發車して、忽ち眼明かなりと驚けば、渺々たる日本海は折しも波に一船を著けず、雲に一鳥を帶びずして、千萬頃の虛しく闊きに、唯池の如き潮の浩蕩として遊ぶのであつた。と見るに、瑠璃の煙る樣に、物ありて幽

に顯るゝのを、早くも「佐渡、々々。」と案内する聲がした。信に香(一)嶽樓の縁端に伸び上つて、「わが眉太し。」(二)と天の一方に望んだ佐渡が島は、今日を遮る物もあらぬ三十海里の波上に、「溫泉水滑洗凝脂。」とやうに浮び出でたのである。

美なる哉、此の島の風情。凡そ眺めてかくも懷しく、又況へん方無く心動かさるゝ遠景色は、之を他に求めて、己は有りとも覺えぬ。直江津の古い「鹽たれ唄」とか云ふに、

佐渡へ〳〵と草木も靡く、

佐渡は居よいよ、住みよいか。

とあるのを見ても、此の景に對して心を動かさゞる者は無いと知れる。殊に「居よいか、住みよいか。」と疑つた處に言は

(一)越後赤倉溫泉にあり。
(二)涼風のわが眉太し佐渡が島。
秋生じりがある。

れぬ妙味が有るので。此の唄の精神も、唯其の九字に存すれば、又此の景に人の恍惚たるのも、頗る其の九字の感に堪へぬのである。又彼の「來いとゆたとて行かりよか。」の如きは、苟も日本語を解する者にして知らざるは無きまでに轟いて居る。其處が古の配處であつたとも知らず、今も小判になる物が出ると知らぬ輩でも、波の上の行かれぬ處と云ふ事は皆心得て居る。それほどの口吟を思はずに、誰一人此が過ぎらるゝであらう。遙かに佐渡が見える「四十九里」と直に胸に浮ぶ。其にしては近いやうだといふ疑が又起るのである。能登の輪島から四十九里と云ふ說が有つて、とにかく越後の唄ではないに極つて居る。佐渡の相川の

人の談に、極々快晴の日、所謂日本晴には能登の珠洲崎が雲煙縹緲として、見えるといへば見える位に見える。其の人は「一年の中に唯一度見た。」と云ふ。因つて「來いとゆたとて行かりよか。」の、首を回して遠人を憶ふ惆悵無限の意が殊に深い。これに就いて思ひ出したのは、過ぐる年、富小路侍從の行くを送つた岸田吟香翁の歌である、なか〳〵面白い。

大君のみおとかしこみ、來いとゆさとて
行かりよかといふ佐渡へ行く君。

己も亦一句無かる可けんやと、

來いといふ人ゐを、島は涼しげかも。

抑、此の海の雄渾と併せて此の島の秀麗を見るのは、北越鐵道線雙快の一で、他は更に進んで、鉢崎から柏崎に抵るまで、米山峠の眞下を磯傳に疾驅しつゝ八門のトンネルを出入するのである。其の趣は稍東海道線の薩埵峠を過ぐるに髣髴たるのであるが、それは皮相の似たるばかりで、彼に在つては、全く此の氣魄を闕く。

道は荒浪の磯邊であるから、一面巖石突兀として、或は潮に臥し、或は草に蹲り、或は山に逆つて峙ち、或は水に臨んで仆ると云ふ有樣。其の、大なるものにあつては、百歩にして崕と壅がり、二百歩にして岩鼻と突き出るのを、總べてトンネルに貫いて、「佛に逢へば佛を殺し、祖に逢へば祖を殺し」、道に當るものあれば必ず突いて進むのである。

トンネル續きの線路は碓氷であれ、箱根であれ、皆理の同じからぬは無いが、別してこゝに其の想が有るのは、長汀逶迤として六枚屏風の將に疊まんずる如き曲折を盡すが故に、甲のトンネルを出づれば直に乙のトンネルの全景が見える、乙を過ぐれば丙、丙が去れば丁と、彼等の爭つて五月蠅なすのが一々目に入る。譬へば、己、大剛の者にして、羣る敵を物の數ともせず、當るを幸、一太刀づつ片端から撫斬にして通るも恁やと覺ゆるやうで、而も、處は弓手に方りて日本海、逃るゝ路も荒磯の浪皷鞳と寄せては返す鬨の聲、馬手には峻嶺峨々として、當國無雙の名も高き米山峠は聳えたり、と思へば、殆ど快極つて肉躍るのであつた。こゝを過ぐれば、

汽車を嫌ふ者も汽車に在るのを忘れ、喜ばしからぬトンネルも時に取つての興となつて、なか〳〵神*經などを衰弱させて居る段ではなかつた。（煙霞療養）

*煙霞療養卷首に、「神經衰弱との診斷で、これを治するは煙霞に如くはなしとの處方であつた。」

一四　音樂

試みに一曲の歌謠を聽け。吾人は之によりて得る感興に二箇の要素あるを發見すべし。一は其の歌謠の意義が我が心を動かせるものにして、一は其の音聲の高低・緩急・抑揚・強弱、槩言すれば其の曲節が我が情を刺衝するものなり。されど歌謠をなせる言語の意義は文字に寫して目之を見るもまたよく之を解するを得。其の音樂的要素にあらざ

るや論なし。されば歌謠のよく音樂たるは一に其の音聲の曲節に存すること明かなり。而して、曲節は言語より其の意義を除去したる聲音の上にあり。かく言語をなさゞる聲音は卽ちまた器樂の依つて立つ所以の基礎なり。吾人は固より聲音其のものに一種の快美を感ず。是恰も色彩其のものを見て喜ぶと同じ。一つの音が耳に快にして他の聲が耳に不快なるは之がためなり。されど吾人は別にこの感覺的快美の感より進んで其の音聲に何等かの表象あるを感ずるなり。其の或は高く昂り或は低く沈み、或は悠揚として長く或は急迫にして短き、一々皆吾人の心情と相應ずるにあらざるはなし。吾人は且く之を名づけて情を含める聲音といはん。この聲音は人々皆其の軌を一にして互に扞格することなきが故に、吾人は耳に他人の聲音をきいて心直ちに之に感應し、敢て謬ることなし。而して此の如き關係はひろく之を推してあらゆる聲音に及すを得べし。蟲吟・鳥語の如き、松韻・濤聲の如き、若しくは金石相擊ち、風絃相鳴るが如き、自然界の聲音に對し、人の之を聽いて且泣き且笑ふは皆之と理を同じうす。畢竟言語をなさゞる音聲に吾人心情の表徵あればなり。器樂の根本原理は實にこゝに存す。器樂は此の如き音聲の醇なるものを選び、粹なるものをとりて所謂樂音なるものを定め、絲竹管絃を假りて之を出さしめ、藝術に必須なる形式を之に

除去（とりのけ）
器樂（樂器）一或る器を使用して音樂をなすもの　オルガン、ピアノ
立つ所以（起る所）
快美（心地よさ）
表象（あらはれ）
昂（あがる）
悠揚（ゆるやか）
急迫（せまる）
且く（一ばゝく）
軌（すじみち）
扞格（もつれ合ひ）
感應（かんじ）
推して（考へて）
蟲吟（虫の音）
松韻（松の音）
風絃相鳴る（風が弦にあたる音）
表徵（あらはれ）
醇（まじりけなし）
粹（まじりけなし）
絲竹管絃（音樂）
心情（心の中）

附與して複合構成せしものなり。而して其の資料たる音聲と之を構成する形式とは皆吾人の情生活と相應じて一一其の表徴たるものならざるはなし。月夜にふきすさぶ一管の笛聲よりシムフォニィの大絃樂曲に至るまで、人の之を聽いて或は泫然として涕をたれ、或は肅然として襟を正し、或は心神朗徹、遠く塵寰を脱して直ちに天地と冥合する感を生じ、或は煩悶懊惱、苦腸九迴するの思をなし、我と樂と融合化一して、樂聲の入つて我が心情となれるか、はた我が心情の化し去つてかの樂聲となれるかを疑ふに至るもの、其の源は實にこゝにあり。要するに器樂の樂聲は人の情の聲なり、人心の最奥處に潛める神祕なる琴線の動ける

反響なり。

されど言語をなさゞる音聲は特殊の意義を有せざるが故に、器樂の表象する感情は一般的・抽象的たるを免れず。例へばこゝに悲哀の情を託せる一曲あり、吾人は之を聽いて涕泣嗚咽するを禁ずる能はず。樂曲の效果はかくて足れり。されど其の悲哀が何の故に生じたる何樣の悲哀なるかは吾人遂に之を知ること無し。歡喜・平靜・苦悶すべて皆此の如し。器樂のあらはすところは特殊の人が特殊の境遇に於ける特殊の感情にはあらざるなり。若し此の如き感情の表象を望まば、吾人は之を言語に要めざるべからず、之を詩歌に要めざるべからず。

境（境遇）

春和景明、（春のやはらかな光をうけて）

雙肩（両肩）

翩々（〜〜）

心神暢快（心に何のやましさもない所なり）

柳條（やなぎの糸）

梳る（ときほぐす）

敍述（のべ方）

更に他の方面より之を見る。人の感情は境によりてあらはれ、自然界の現象に應じて變化す。春和景明、風暖かに霞たなびき、小川の流緩うして、岸邊の柳綠なり。人この光景に對すれば、氣暢び心ゆるやかにして、われまた雙肩、胡蝶の翼に化し、翩々としてかの菜花に戯れんとする思あり。器樂はよくこの心神暢快の感をあらはすを得ん。されど其の霞たなびける狀、小川流るゝ狀、もしくは春風ゆるやかに柳條を梳る狀をばうつす能はず。此の如き敍述はまた之を言語に要めざるべからず、之を詩歌に要めざるべからざるなり

是に於てか聲樂あり。聲樂は言語をなせる人聲卽ち歌詞

施律（教則）旋律（曲節）

めぐく（ととのはつて）

に、旋律ある曲節を附せるものにして、詩歌と音樂との結合せるものなり。（音樂通解に據る）

一五　十八樓の記

松尾芭蕉

美濃の國長良川に臨みて水樓*あり、あるじを賀島氏といふ。稲葉山後に高く、亂山左右に重なりて、近からず遠からず、田中の寺は杉の一むらにかくれて、岸にそふ民家は竹のかこみの綠も深し。曝布處々に引きはへて、右に渡船浮ぶ。里人行きかひしげく、漁村軒を竝べて、網を曳き釣を垂るゝおのがさま〳〵もたゞこの樓をもてなすに似たり。（景色をそへうよーにたゝえる）暮れがたき夏の日も忘るばかり、入日の影も月にかはりて、波にむ

*岐阜市にあり。

高欄（高きてすり）

蕭湘八景
江天暮雪
蕭湘夜雨
山市晴嵐
遠浦歸帆
煙寺暗鐘
平沙落雁
漁村夕照
洞庭秋月

すぼるゝ篝火の影もやゝ近く、高欄のもとに鵜飼するなどは、誠にめざましき見ものなりけらし。かの瀟湘の八つのながめ、西湖の十の境も涼風一味のうちに思ひやるべし。もしこの樓に名をいはんとならば、十八樓ともいはまほしきなり。

（風俗文選）

洞庭湖畔にあり。

浙江省孤山の麓にあり。

西湖十景
平湖秋月
蘇堤春曉
斷橋殘雪
雷峰殘照
南屏曉鐘
翁院風荷
花港觀魚
柳浪聞鶯
三潭印月
雨峰插雲

この頃さり目よ見ゆるもの皆涼さ。

一六　田中の里

早苗　　小澤蘆庵

時來ぬとさかへとりゝ出で果てゝ、
田中の里はかつぞをびさ沈。

記錄
郊原（のはら）
薄（すゝき）
酸たる（すぱすぱする）
小歌（はやうた）

夏月　　加藤千蔭

みづえ芝さ葉びろくまがし露ちりて、
月おもゝろき夜半よもゐるこの花。

夕立　　香川景樹

夕立の雨の八重雲たちまおよ
ぬるさばらくさ夏なこの日ぞ。

一七　百花譜

大町桂月

郊原一路、滿目すべて薄なり。夕陽沈まんとして雲色哀しみ、西風冷かにして、酸たる鳥聲、秋の恨を語る。馬の嘶く聲まづ聞え、小歌聞えて、近づくを見れば、若き農夫馬背にあり。

手綱は、鞍にあづけたるまゝにて、馬の自ら歩むは熟せる路にや。 鴉飛びつくして、四面寥廓たり。 ふと顧みれば、招く尾花の末に、一團の大月明かなり。

雀の聲滑なる冬の日和、日かげ暖かに圓窗を射て火鉢の火も消えかゝれり。 室淨うして點塵なし。 牀の閒の俗氣なき畫幅の下、水仙三つ四つ露を帶びたり。 老人二人靜に局に對して、子を下す聲、時に丁々として響く。

桃花數株、茅屋を圍みて、鷄聲午なり。 桔槔動かずして一犬門外に眠り、屋内よりは鄙びたる歌の聲、機杼の聲と共に洩れ來る。

一泓の池水、半ばこれ蓮花。 白や紅や影を水に落して、水に花あり。 健鯉時に躍りて、波文岸に及ぶ。 水樹深く鎖して、人籟なし。 曉煙垂柳を罩めて、日未だ昇らず。

流るとしもなき里川、底は泥なれども、水は澄みたり。 こなたは小徑行人なく、かなたに椿自ら垣になりて、多く花を著けたり。 流鶯時に一聲。 思ひがけずも、大輪の花ぽとりと水に落ちて、水暫くは文をなす。

村はづれに岐路ありて、問はんとするに、人なし。 馬頭觀世音の石像、頑として物いはず。 側に生ひ出でたる幾莖の女郎花なよ〳〵として、風にもだゆ。

侶伴なくて、詩を思ひつゝたどる山路、到る處櫻花多し。 春風一陣、空に晴雪をちらし、地に綾の莚を敷く。

池畔の掛茶屋、少女、欄に凭り、手をうちて鯉を呼ぶ。稚兒立ちて麩を投ぐ。柵上の藤花累々としてさがりて、人の頭に及ばんとす。

麥浪に連なる一面の菜花。菜花や黄、麥浪や綠。滿地みな色あり。行人絶えて遊絲のどかにかゝり、一雙の胡蝶追逐し去つて、行く處を知らず。

夏の日暑く、山路嶮しく、喘ぎ〳〵上るに、渴を催して、堪へ難きとき、水音聞えていと嬉しく、荆莽を排して之に就けば、急湍清玉を迸らす。一掬、二掬、三掬、漸く蘇生の思をなして、ふと目を注げば、苔滑なる巖の上に百合の花危げに立てり。折らんと欲して折るに忍びず、立別れんとすれば、滋き水のしぶきに、花涙を含むが如し。

白鷺の小首傾けて立てる洲邊、蘆花雪を吹く。夕陽傾きて、柳影長き隄の上、往きかふ人なし。巨蟹這ひ出でて、泡を吐きつゝ螯を擧げて空を挾む。

馬にはません料とにや、利鎌を朝日にきらめかして、露ながら刈りたる草の一束、背に載せて歸りゆく田舍少女、知りてか、知らずてか、その草の中に、桔梗一枝まじれり

鸚鵡語りつくして、日暮れんとす。人を待てども、到らず。蕭々たる細雨、庭の秋海棠に灑ぐ。（春草秋草）

一八　鎭西八郎爲朝　その一

新院は齋院の御所より北殿に遷らせ給ふ。左府は車にて參り給ふ。白河殿より北、河原より東、春日の末に在りければ北殿とぞ申しける。南の大炊御門表に、東西に門二つあり。東の門をば平馬助忠正承つて、父子五人並に多田藏人大夫頼憲、都合二百餘騎にて固めたり。西の門をば六條判官爲義承つて、父子六人して固めたり、其の勢百騎許りには過ぎざりけり。これこそ猛勢なるべきが、嫡子義朝に附きて、多分は内裏へ參りけり。

こゝに鎭西八郎爲朝は、「我は親にも連れらるまじ、兄にも具すまじ、功名不覺も紛れぬ樣に、只一人いかにも強からん方へ差向け給へ。たとひ千騎もあれ、萬騎もあれ、一方は射拂

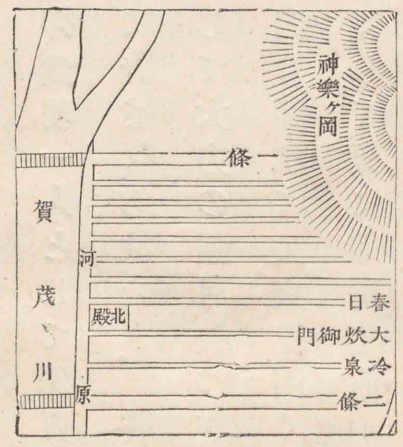
崇德上皇。
左大臣藤原頼長。
都合（合計）
保元の亂
鳥羽
崇德
重仁
後白河
近衛
後白河方
藤原忠通
源義朝
平清盛
不覺（失敗）
いかにも（最も）
嫡子（長男）
内裏
白河殿

はんずるなり。」とぞ申しける。依つて西の河原表の門をぞ固めける。北の春日表の門をば左衞門大夫家弘承つて、子供具して固めたり、其の勢百五十騎とぞ聞えし。

抑、爲朝一人として殊更大事の門を固めたること、武勇天下に許されし故なり。件の男、器量、人に超え、心飽くまで剛にして、大力の强弓、矢つぎばやの手利なり。弓手の肘、馬手に四寸延びて、矢束を引くこと世に超えたり。幼少より不敵にして、兄にも所を置かず、旁若無人なりしかば、身に添へて都に置きなば惡しかりなんとて、父不孝して十三の歲より鎭西の方へ追ひ下すに、豐後の國に居住し、尾張權守家遠をめのととし、肥後の阿曾平四郎忠景が子に三郎忠國が婿に

崇德上皇
藤原頼長
源爲義
源爲朝
平忠正
中の間（二つの間）
器量（技倆）
テキ（上手）
矢束（矢長さ）
ヤツカ
ヤクワムシン
旁若無人
不孝（親とうとまれ）
親孝行（おやをやく）
王猛謂二桓溫一而談二世事一常捫レ蝨而言。旁若レ無レ人。

成つて、君よりも賜はらぬ九國の總追捕使と號して筑紫を從へんとしければ、菊地・原田を始めとして、處々に城を構へてたて籠れば、「其の儀ならば、いで落して見せん。」とて、未だ勢も附かざるに、忠國ばかりを案内者として、十三の歳の三月の末より十五の歳の十月まで、大事の軍をすること二十餘度、城を落すこと數十箇所なり。城を攻むる謀、敵を伐つ術人に勝れて、三年が内に九國を皆攻め落して、みづから總追捕使におし成つて悪行多かりけるにや、*香椎宮の神人等都に上り訴へ申す間、いにし久壽元年十一月二十六日、德大寺



*筑前國にあり。仲哀天皇・神功皇后を奉祀す。今官幣大社たり。

中納言公能卿を上卿として、外記に仰せて宣旨を下さる。

源爲朝、久住宰府、忽諸朝憲、咸背綸言、梟惡頻聞、狼藉尤甚、早可令禁進其身、依宣旨執達如件。

然れども、爲朝猶參洛せざりければ、同じき二年四月三日、父爲義を解官せられて前檢非違使に成されけり。爲朝これを聞きて、「親の科に當り給ふらんこそあさましけれ。その儀ならば我こそいかなる罪科にも行はれんずれ。」とて急ぎ上りければ、國人共も上洛すべき旨申しければ、「大勢にて罷り上らんこと、上聞穏便ならず。」とて、形の如くに就き從ふ兵ばかり召具しけり。依つて去年より在京したりしを、父不孝を宥して、今度の御大事に召具しけるなり。（保元物語）

一九　鎭西八郎爲朝　その二

爲朝は七尺ばかりなる男の、目角二つ切れたるが、紺地に色色の絲を以て獅子の丸を縫つたる直垂に、八龍といふ鎧を似せて、白き唐綾を以て縅したる大荒目の鎧、同じき獅子の金物打つたるを著るまゝに、三尺五寸の太刀に熊の皮の尻鞘入れ、五人張の弓長さ七尺五寸にて鈌打つたるに三十六差したる黑羽の矢負ひ、兜をば郎等に持たせて歩み出でたる體、樊噲も斯くやと覺えてゆゝしかりき。謀は張良に劣らざれば、堅き陣を破ること吳子・孫子が難しとする所を得、弓は養由をも恥ぢざれば、天を翔る鳥、地を走る獸、恐れずといふことなし。上皇を始め奉つて、あらゆる人々音に聞ゆる爲朝見んとて擧り給ふ。

左府乃ち「合戰の趣討らひ申せ」と宣ひければ、畏つて「爲朝久しく鎭西に居住仕つて、九國の者ども從へ候について大小の合戰數を知らず。中にも、折角の合戰二十餘箇度なり。或は敵に圍まれて强陣を破り、或は城を攻めて敵を滅すにも、皆利を得ること夜討にしくこと候はず。然れば、只今高松殿に押寄せ、三方に火をかけ、一方にて支へ候はんに、火を遁れん者は矢を免るべからず、矢を恐れん者は火を遁るべからず。主上の御方、心にくゝも候はず。但し兄にて候義朝などこそ駈け出でんずらめ。それも眞中さして射通し

(一) 源氏重代の鎧。
(二)(三) 共に漢高祖の臣。
(四) 名は起、衞の人、兵法の大家。
(五) 名は臏、齊の人、兵法の大家。
(六) 楚の人。弓の名手。

縅オドシ

四 曾我ハ後、楚悍吉ハ郎等（家ノ中ノ者）

五 呉ノ闔廬ニハ

左府（左大臣）

大事（折角）

心にくゝも候はず（まばゆくみるまでは思ひ知れん）

* 假内裏、後白河天皇の御所。

候ひなん。まして、清盛などがへろ〳〵矢何程のことか候べき。鎧の袖にて拂ひ、蹴散らして捨てなん。行幸他所へ成らば、御免されを蒙つて御供の者少々射んずる程ならば、定めて駕輿丁も御輿を捨てゝ逃げ去り候はんずらん。其の時爲朝參り向ひ、行幸を此の御所へ成し奉り、君を御位に卽け參らせんこと掌を反す如くに候べし。主上を迎へまゐらせんこと、爲朝矢二つ三つ放さんずる計りにて、未だ天の明けざらん前に勝負を決せん條、何の疑か候べき。」と憚る所もなく申したりければ、左府「爲朝が申す樣、以ての外の荒儀なり。年の若きが致す所か。夜討などいふ事、汝等が同士軍、十騎二十騎の私事なり。さすが主上・上皇の御國爭に、

源平數を盡して兩方に在つて勝負を決せんに、むげに然るべからず。其の上南都の衆徒を召さるゝことあり、興福寺の信實・玄實等、吉野十津河の指矢三町・遠矢八町といふ者どもを召具して千餘騎にて參るが、今夜は宇治に著き、富家殿の見參に入り、曉こゝへ參るべし。彼等待ち調へて合戰をば致すべし。又明日、院司の公卿・殿上人を催さんに參らざる者どもをば死罪に行ふべし。首を刎ぬること兩三人に及ばゝ殘はなどか參らざるべき。」と仰せられければ、爲朝、上には承服申して、御前を罷立ちてつぶやきけるは、「和漢の先蹤、朝廷の禮節には似も似ぬ事なれば、合戰の道をば武士にこそ任せらるべきに、道にもあらぬ御計らひ如何あらん。

*左大臣頼長の父忠實の宇治の別業。

義朝は武略の奥義を究めたる者なれば、定めて今夜寄せんとぞ仕り候らん。明日までも延びばこそ吉野法師も奈良大衆も入るべけれ、只今押寄せて風上に火をかけたらんには、戰ふともいかで利あらん。敵勝つに乘る程ならば、誰か一人安穩なるべき。口をしきことかな。」とぞ申しける。

（保元物語）

二〇　武將の連歌

橘成季

伊豫守源頼義朝臣、貞任・宗任等を攻むる間、陸奥に十二年の春秋を送りけり。鎭守府を立ちて秋田の城に移りけるに、

雪降りて軍のをのこどもの鎧皆白妙になりにけり。衣川の館、岸高く川ありければ、楯を戴きて冑に重ね、筏を組みて攻め戰ふに、貞任等堪へずして、遂に城の後より遁れ落ちにけるを、一男八幡太郎義家衣川に追ひ立て攻め伏せて、「きたなくもうしろを見する者かな。しばし引き返せ、物言はん」と言はれたりければ、貞任見返りたりけるに、

衣のさてはほころびにけり。

と言へりけり。貞任くつばみをやすらへ、錘を振向けて、

年を重し絲のみだれのくるしさに、

と附けたりけり。その時義家、はげたる矢をさしはづして歸りにけり。さばかりの戰の中に、やさしかりけることか

な。（古今著聞集）

弓張月

高倉の院の御時、御殿の上に鵠の啼きけるを、惡しきことなりとて、いかゞすべきといふことにてありけるを、ある人頼政に射させらるべき由申しければ、さりなんとて、召されて參りにけり。この由を仰せらるゝに、畏りて、宣旨を承りて心中に思ひけるは、「畫だに小さき鳥なれば得難きを、五月の空、闇深く、雨さへ降りて言ふばかりなし。我すでに弓箭の冥加盡きにけり。」と思ひて、八幡大菩薩を念じ奉りて、聲を尋ねて矢を放つ。應ふるやうに覺えければ寄りて視るに、あやまたず中りにけり。天氣より始めて、人々の感歎言ふば

かりなし。後德大寺左大臣その時祿をかけられけるにかくなん。

杜鵑、名をも雲ゐに揚ぐるかな。

頼政取敢へず、

弓張月のいるにまかせて。

と附けたりける、いみじかりけり。まかり出でて後に、「昔養由雲外射鴈、今頼政雨中得祿。」とぞ感ぜられける。（十訓抄）

二一　事務の才幹

島田三郎

羽衣・星冠、竹杖を三山の邊に寄せて琪樹の花に對し、霞觴を擧げて沆瀣に醉ふを一生の能事とせば卽ち已む。苟も此

白駒（光陰）
落魄（あちこちまよふこと）
惱殺（なやむこと、なやまさること）
轗軻（ふし合せ、不遇）
蹉跎（すまずきること、時を失ふこと）

*人生ハ天地之間ニ若ニ白駒之過セル隙ノ忽然而已。

の活動せる社會に躍り出でて雄飛せんと欲せば、必ずや大いに實務に注意せざるべからず。見よ、白駒足早み、機は忽焉として來り忽焉として去る。しかも執らざるべからざる事務は刻々吾人を襲ふにあらずや、圍むにあらずや　吾人は此の重圍の中に惱殺せられんか、そもまた紫電一閃圍を衝いて出でんか。若し前者をとらば、轗軻落魄、人生の蹉跎たり易きを嘆ずるに至らん、後者をとらば、必ずや運命の舟に眞帆かけて成功の彼岸に達せん。果して然らば、事務の才幹は實に吾人の前途を定むる一因なりといふべし。然らば如何にしてか事務に長ずべき。曰く、時を惜まざるべからず、曰く書翰を認むるに慣れざるべからず。此の二

隴畝（はたけ）
河陽（かはのほとり）
はしたなく（つき）

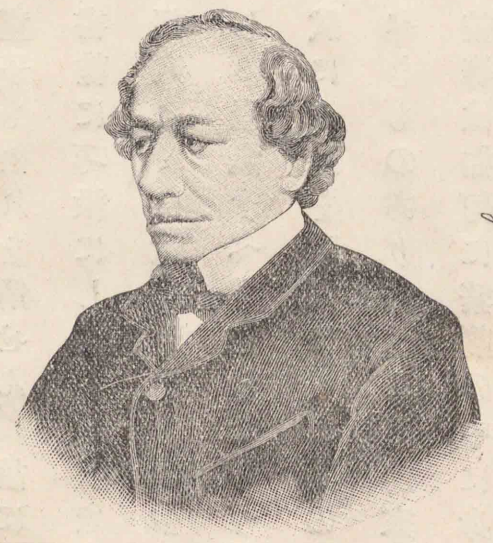
つのものは謹愼精細なる事務家の一日も忘るべからざることに屬す。我が國、時計の輸入ありて僅に五十年、時の觀念未だ深く人心に刻まれず、嘆ずべきの至なり。試に寒村僻邑に入りて隴畝の老農を見よ、河陽の漁翁を見よ。彼等に時を尊ぶ觀念なし、彼等に時を惜む慣習なし。彼等約するところあるも、期に至つて履行せざるなり。履行せざるも、恬然、平然、相關知せざるものゝ如し。豈驚くべからずや、然れどもこはこれ獨り寒村僻邑の人のみにあらず、五千萬の同胞多くは皆是なり。百萬都城の人と雖も其の能く此の如くならざるもの果して幾何ぞ。然れども幸に茲に此の弊を矯むる二大勢力あり。何ぞや。學校生活及び全國

皆兵制度卽ち是。此等は皆時を基として義務を割りあてたるもの、時をあやまれば罰忽ちこれに隨ふ。青年學に就くもの四百萬を以て數ふ。壯年役に服するもの亦幾萬ぞ。次代國民の中堅を形づくるものは槩ね此の中にあり。故に此等の學生・兵士進んで青雲に入るも、退いて田野に耕すも、時の觀念を失はざらんか、庶幾はくは數千年來馴致せる此の流弊を打破することを得ん。余が輩不幸にして時を惜まざる空氣の中に長じ、時を惜む習慣未だ强固ならず、一日外人と約するあれば、心裡介焉として安んぜざるを覺ゆ。正に一段の修養を要するところとす。

凡そ此の繁劇多事の世に一々歩を運び車を驅つて人の門を叩き、始めて萬般の事務を辨ぜんとするは迂愚の極なり。既に郵便の設あり、これを利用せざるべからざるは三尺の童子もこれを解せん。故に今日事務家たらんものは須く書翰に巧緻にして且敏快ならざるべからず。然るに我が邦人こゝに意を致すもの少なく、又其の必要を說くものなし。豈慨すべきことならずや。

試にこれを歐人に見よ、其のこれに長ぜることは寧ろ驚くべきものあり。殊に周旋家・事務家において然るを見る。彼等は如何に繁劇の中に身を投ずるも、一日二三十通の書翰を自ら裁せざる者なしといふ。見よや、政海波瀾驚いて風急に、政治家といふ政治家皆衣を拂つて起つ時に當り、一

家の浮沈と一黨の消長と一國の盛衰とを目前に見ながら千古の異材ディスレリーが悠々筆をとりて、其の妹に通信する狀を。或は曰く、「余は明日演說せん。」と。或は曰く、「日ならずして廟廊に翺翔せん。」と。或は曰く、「近日冠を掛けて去らん。」と。彼が境遇と彼が心情と彼が家庭と彼が骨肉相愛の情とは集めて彼が書翰集にあり。又見よや、悲風千里吹き荒みて止まず、妖雲羃々カルツームの城陷らんとす。骨を暴さんか、援兵は至らず



ディスレリー

(一) 英國の政治家、小說家。一八〇四—一八八一。

(二) ヌビアの市、白ニール河と青ニール河との會合點。

捕虜たらんか、マヂーの軍は雲の如し。此の際、此の時、近世の奇傑ゴルドンは從容書を認め、萬里鴻鴈に托して意を致しゝを。變を見て其の平素を知るべし、平素を見て其の成功を知るべし。此の大政治家と此の好將軍と其の芳名の今日に薫しき所以、亦何ぞ驚くに足らんや。

ゴルドン

由來東洋の豪傑多くは磊落に、事務を以て刀筆の細事と、齷齪たらんや。」と。故に其の言は壯なりと雖も其の論は空。其の擧動は勇なりとし、皆高吟して曰く、「大丈夫豈細事に

(一) 回々教の首領。

(二) 英國の雄將。一八三三—一八八五。

雖も其の事蹟は見るに足らず。眞正の豪傑は決して然らざるなり。請ふ之を事實に徵せん。西晉の陶侃の如きは其の人なり。當時人多くは清談を好み空理に流れ、老莊を學んで無爲を喜び、事務の何物たるを知るものなし。侃獨り毅然として一世の風に抗し、朝に甕を門外に運び、夕に甕を門内に運ぶ。事務家たる知るべきなり。傳に曰く、「遠近書疏無不答、筆翰如流」と。其の書翰に妙を得たる知るべきなり。孔明は亦かくの如き人なりしならん。身三軍に長として又帷幄に計を畫し、尚日に罪二十以上を聽き、終に司馬懿をして「孔明の勵精此の如くんば、其の生や長からず。」と豫言せしむるに至れり。事務に長けたるにあらずんば曷

事を好む、莊子及び易等
老莊（老子、莊子）
活潑無礙（利鈍にかかわらず、なるもの）
書疏（り書信）
帷幄（まく、たれすく）

ぞよくせん。彼、眇たる南陽の一布衣を以て一擧して天下の風雲を捲き、漢室を興隆せしめたる所以のもの、豈此の特性に資らざるを知らんや。

本朝に於ても、元祿享保の儒者多くは書翰に巧なり。新安手翰を讀まば誰か此等の文豪が漢文のみならず、尺牘にも亦巧妙精緻を極めたるを嘆ぜざる者あらんや。徂徠先生答問書を見ば誰かまた支那の古文辭に心醉せる文豪の手に成れる候文の極めて通俗に極めて簡明なるに驚かざるものあらんや。山陽外史又特に書翰を善くせり、而して往復の書一々自ら筆を執りて之を裁せざるはなかりき。佐久間象山又之に秀でたり。其の文朗々として誦すべし。

一布衣（平民）
尺牘（手紙）
心をかたむける。

新井白石と安積澹泊との間に贈答せる書翰を輯錄したるもの。
荻生徂徠の人の問に答へたる書牘を編輯したるもの。

特に象山の書の如きは多くは京師の間に往來し、萬死の途に出入せし時に成りしものなりといふを聞くに及んで、余は轉、象山の象山たる所以を想起せざるを得ざるなり。

嗚呼我が國は今や日本の日本にあらずして世界の日本となれり。鎖國的日本にあらずして膨脹的日本となれり。豈豆大の天地に跼蹐して能事了れりとすべけんや。世界の旅人とならざるべからず、世界の出稼人ともならざるべからず、世界の貿易者ともならざるべからず、學術の探檢者ともならざるべからず、又世界と通信する人ともならざるべからず。この時に於て書翰に慣れずんば何を以てか用を辨ずるを得ん。漫に書記ありといふことなかれ。自筆と代筆と同じく自己の書翰なれど、其の人を動かすに於て、其の社會を支配するに於て、其の優劣果して如何ぞや。文章は思想の表彰なり、心情の描寫なり。代筆を以て思想の表彰完全に行はるべしとするか、心情の描寫遺憾なしとするか。吾人は斷じて否と答へん。吾人の見を以てすれば、書翰は啻に事業の上に必要なるのみならず、社交上にも亦必要なり。若し此の言を疑ふものあらば、請ふこれを西人に見よ、これを東人に見よ、これを古人に見よ、而してこれを今人に見よ。苟も社會に影響を與へたる士ならんには、必ずや此の好習あるを發見するに難からざるべし。（修養談叢）

二二　妹にさとす

吉田松陰

この間は(一)御文下され、觀音様の御洗米、三日の精進にていただき候やうとの御事、御深切の御志感じ入り申候。精進・潔齋などは、隨分心のかたまり候ものにてよろしき事と存候につき、拙者も二月二十五日より三月晦日まで少々志の候へば、酒肴ども一向たべ申さず候。その間、一度(二)靈神様御祭のもの頂戴致候ばかりに御座候。まして三日の精進はさまでむづかしき事にもこれなく、御深切の事に候へば相果したく存候へども、當所にては、あたりまへの精進の外にまた精進と申候うては、連中又は番人ども何故と怪しみ尋ね候につき、それを

(一) 安政六年四月十三日松陰が野山の獄に在りて長妹千代子に與へしもの。

(二) 杉氏祖先の靈。

それと相答へ候事面倒に存候故、八日よりさいはひ精進日なれば、その日一日にいたゞき申候。

そも〳〵觀音様信仰せよとの事は定めし禍をよけ候ためなるべく、これには大いに論のある事に候へば、委細申し進ずべく候。法華經第二十五の卷普門品と申すに、觀音力と申す事高大に述べてこれあり候。大意は、觀音を念じ候へば、繩目にかゝり候へば忽ちぶつぶつと繩が切れ、人屋へ捕はれ候へば忽ち錠・鍵がはづれ、首の座へ直り候へば忽ち刀がちん*ぢに折るゝなど申してこれあり候。これは、拙者江戸の人屋にてこの經は幾度も繰返し讀みて見候へども、始終この趣に候。

* 方言、微塵の意。

それ故、凡人はこれよりありがたき事はなしとて信仰するも無理はなく候。

さりながら、佛の教は奇妙なる仕懸にて、大乘・小乘と二つに分ちて、小乘は下根の人への教、大乘は上根の人への教と定めこれあり候。小乘にて申し候へば、觀音は右の經文の通りのものと心得、ひたもの信仰せしむることに御座候。これは大いに信を起さするためなり。信を起すとは、一心にありがたい事ぢやとのみ思ひ込み、餘念他慮なき事にて、一心不亂と申すもこの事なり。人は一心不亂になりだにせば、何事に臨み候うてもちつとも頓著なく、繩目も人屋も首の座も平氣になられ

*生老病死の四苦を免るる教。

悉達太子

候ゆゑ、世の中に、如何に難題苦患の來るとも、それに退轉して不忠・不孝・無禮・無道等仕る氣遣はなし。されど、初めより凡夫に、一心不亂の、不退轉のと申し聞かせても、少しも耳に入らぬもの故に、かりに觀音様を拵へて人の信を起させ候教に御座候。これを方便とも申候。さてまた大乘と申す方にては、出世法と申す事が肝要に御座候。出世と申候うても、立身出世など申す事には御座なく候。その初は、釋迦が天竺王の若殿に候ひし處、若き時より感の強き人にて、老人を見ては我が身も往くさきは老人にならんかと悲しみ、死人を見ては我が身も往くさきは死なんかと悲しみ、蟲けらの死に

たる、草木の枯れたるまでに悲を發し、生老病死がこの世の習なれば、是非にこの世を出ねばすまずと志を立てゝ、年二十五の時位を棄てゝ山に入り、右の生老病死を免るゝ修行をしに參られ候。さ候うて三十出山とて、わづか五年の間に生老病死を免るゝ事を悟り、生れもせねば老いもせず、病みも死にもせぬ事を悟つて出で來て、それより世の人を教化せられたり。これが卽ち出世法なり。故に、出世せねば濟世の出來ぬと申すもこの事なり。濟世といふは、卽ちこの世の人を濟度することに御座候。さてその死なずと申すは、近く申さば釋迦の、孔子のと申す御方々は、今日まで生きて居

らるゝ故、人が尊みもすればありがたがりもし、恐れもするなり。果して死なぬに候はずや。死なぬ人なれば、繩目も人屋も首の座も、前申す觀音經の通りには候はずや。楠木正成とか大石良雄とか申す人は刃ものに身を失はれ候へども、今以て生きて居らるゝなり。卽ち刀のちんぢに折れたる證據なり。

さてまた「禍福繩の如し。」といふ事を御悟なるが宜しく候。禍が福の種、福が禍の種に候。人間萬事塞翁が馬に御座候。拙者など、人屋にて死ぬる事に候へば、禍のやうなるものに候へども、また一方には學問も出來、己のため、人のため、後の世へも殘り、かつ〳〵死なぬ人々

*淮南子に見ゆ。

の仲間入りも出來候へば、福この上もなき事に候。人屋を出て候へば、また如何なる禍の來んも知れ申さず候。勿論、その禍の中にはまた福も交り候へども、所詮一生の間難儀だにせば、先には福あるべし、何の效驗もなき事に、觀音に頼みて福を求むるやうの事は、必ず必ず無益に存候。」

尤も右の通りに申候へば、身勝手なる申分、不孝なる申分と御存あるべきか、こゝにまた論あり。易の道は滿盈と申すことを大いに嫌ふなり。御互に七人兄弟の中、拙者は罪人、艶は夭折、敏は唖子、ふざまのわるきやうなるものなれど、あと四人はいづれも可なりに世を渡

（一）天道虧盈而益謙。

（二）杉百合之助
杉吉田民治
杉田寅次郎
杉門兵衛に嫁す
杉兵玉千代子
杉太郎小田村素子に嫁す
杉艶子（天）
杉久阪義和子
杉美助
杉敏三郎に嫁す

られ、特に兄様・そもじ・小田村は兩人づつも子供があれば不足は申されず。世の中の六七人も兄弟のある家を見くらべよ。これ程にも參らぬ家は多きものぞ。近くはそもじの家にても、高須などにても、兄弟の内にはわろき人も隨分あるなり。然れば父母・

一士道莫大於義義因勇行勇
因義長
一士行以質實不欺爲要以仍
詐文過爲恥光明正大皆由
是出
一成德達材師恩友益多
百故天子愼交游
一死而後已四字言簡而義
該堅忍果決確乎不可拔
者舍是無術也
二十一回猛士錄

吉田松陰筆蹟（士規七則の内）

兄弟の代りに拙者・艶・敏の三人が禍を受くるにこそと思ひ候はゞ、父母様の御心も濟まるゝ譯には候はずや。かつ杉は隨分多福の家なれば、拙者の身の上よりは、卻て杉が氣遣なるものなり。拙者身の上は前に申す通り、つめが牢死、牢死しても死なぬ仲間なれば、後世の福は隨分あれど、杉は今にては御父子とも御役にて何の不足もなき中なれば、子供等がいつもこの様なるものと思ひて、昔山宅にて父様・母様の晝夜御苦勞なされたる事を話して聞かせても眞とは思はぬ程なれば、この先、五十年七十年の事をとくと手を組んで案じて見られよ、氣遣なるものにては候はずや。去年も端午に客

*杉常道隱逸の地。萩城の東方護國山麓に在り。

の多きを、人はめでたしゝと嬉しき顏をすれど、拙者は何分先の先が氣遣にてたまらぬゆゑ、始終稽古場にかゞみて、人の知らぬ處にてはひとり落涙したる程の事なりき。

もしや、萬一、*小太郎が父祖に似ぬやうなる事あらば、杉の家も危し、〳〵。父母様の御苦勞を知つて居るもの、兄弟にてもそもじまでぞ。小田村にてすら山宅の事はよくは覺えて居るまじ。まして久阪などは猶以ての事。されば、拙者の氣遣に觀音様を念ずるよりは、兄弟甥姪の間に「樂は苦の種、福は禍の本。」と申す事をとくと申し聞かする方が肝要なり。

*兄民治の子。

なほまた一つ、拙者不孝ながら孝に當ることあり。兄弟のうちに一人にてもふざまのわろき人あれば、あとの兄弟も自然と心が和ぎて孝行するやうになり、兄弟も睦まじくなるものなり。これより拙者は兄弟の代りにこの世の禍を受け合ふゆゑ、兄弟中は拙者の代りに父母様へ孝行してくるゝがよし。さすれば、つゞまるところ兄弟中皆よくなりて、はては父母様の御仕合せ、また子供が見習ひ候へば、子孫のためこれ程めでたき事はなきにあらずや。よく〳〵御勘辨候うて、小田村・久阪なんどへもこの文御見せ、佛法信仰はよき事なれど、佛法に迷はぬやうに、心學本なりと、をりをり御見候へかし。心學本に、

のどけさよ、彩がひな紀身の神まうて。

神へ願ふよりは身に行ふがよろしく候。（俗簡襍輯）

二三　第一等の人

幸田露伴

陽明先生曰く、「學は志を立つるより先なるは莫し。志の立たざるは猶其の根を種ゑずして徒に培養・灌漑を事とするが如く、勞苦して成ること無し。世の因循苟且、俗に隨ひ非に習つて而して卒に汚下に歸するものは、凡て志の立たざるを以てなり。故に程子曰く、『聖人と爲るを求むる志あつて然して後與に共に學ぶべし。』と。」是、先生は學者に向つて

陋態（みすぼらしい態）
晏起（おそくおきること）
狹斜（遊廓）

劈頭第一に聖人たらんことを求むる志を立てんことを要し、此の志にして能く立たずんば、學終に成る日なしとせらるゝなり。それ眞に能く聖人たらんとする大志を立て得ば、一切卑劣の情念は皆自ら解け去るべく、因循苟且・隨俗習非の陋態は皆自ら一洗し得ん。

同窗の友十人にして晏起するもの七八なる時は、我もまた晏起して自ら咎めず、同年輩の朋十人にして飲酒し、喫煙し、狹斜に出入するもの八九人なる時は、我もまた飲酒し、喫煙し、狹斜に出入して自ら責めざるは、中等の天資を有する者の常なるが、これを俗に隨ひ非に習ふとは云ふなり。それ中等の天資を有する者は、自ら奮はゞ、上は聖賢の域に到るべく、自ら棄てば、下は庸愚の列に入るべきものなり。されば此の種の人は是非善惡を識別する能力無きにあらざれども、未だ必ずしも是にして善なるものを取る能はず、未だ必ずしも非にして惡なるものを舍つる能はず、知らず識らず、俗に隨ひ非に習ひて、終に尋常一樣・俗頭俗腦・凡骨凡情の人となり了るを常とす。是、豈悲しむべく憤るべき事に非ずや。

學者固より志を立てざるべからず。志を立つる又固より聖賢たるを求めざるべからず。「我豈聖賢たるを希はんや、我小人たらざるを得ば足れり。」といふが如きは、其の言謙退の美あるに似て、而も其の氣象偏小、憐むべく、厭ふべし。志

を立つるは必ず極高極大ならざるべからず。志は心の標的なり。志すところにして極高極大ならざれば、必ずや輕忽慢易の意生じて敬虔誠實の情乏しきを免れざらんとす。輕忽慢易の意一たび生ずれば、一局の棊猶且敗る。況や其の他をや。敬虔誠實の情乏しければ、箭を飛し彈を放つ、猶且其の中らんことを必し難し。況や其の他をや。道德功業に志す者は、必ずや聖賢となる志を立つべきなり。詩歌を事とする者は、必ずや詩歌の聖たらんとする志を立つべきなり。商となり、工となり、農となり、官となる、人の志すところ一途ならずと雖も、要するに皆其の好むところの第一等の人たらんことを求むべきなり。聖賢は鬼にあらず、其

の人にして醇なるの故を以て尊きなり。聖賢も人なり、我も亦人なり。其の人たるに於てや、聖賢も猶我の如きなり、我も猶聖賢の如きなり。たゞ彼は既に醇、我は猶未だ醇ならずして渣滓甚だ多く、色香美ならず、氣味純ならざるの差あるのみ、必ずしも全く相異なるにはあらざるなり。異なることは則ち異なれども、而も、異中に同あるなり。我の聖賢に同じき所以のものを擴充すれば、我卽ち聖賢たらん。「舜何人ぞや、予何人ぞや。」宇宙豈我が聖賢と共に相攜へて同じく行くを妨げんや。成すことあらんと欲する者は須く大丈夫底の氣象を有し、大丈夫底の志を立つべきなり。

（成功）

*顏淵曰、舜何人也、予何人也、有レ爲者亦若レ是。

二四　はぎ

葛飾の龍眼寺に萩を見て　朱樂菅江

よせぎぬと見ゆる御寺の飾かな、
どこもかしこもはぎだらけかな。

早春　四方赤良

生醉の禮者を見きば、大道を
横ぎちがひに春は來ふまじ。

早蕨

早蕨が握りこぶしを振りあげて、
山の横はらはる風ぞ吹く。

郭公に有明の月かきたる繪に
杜鵑鳴きつるかとに、あかれさる
後德大寺の左大臣あけは顏。　木端

世の中は何のへちまと思へども、
ぶらりとしては暮されもせば。　宿屋飯盛

歌人

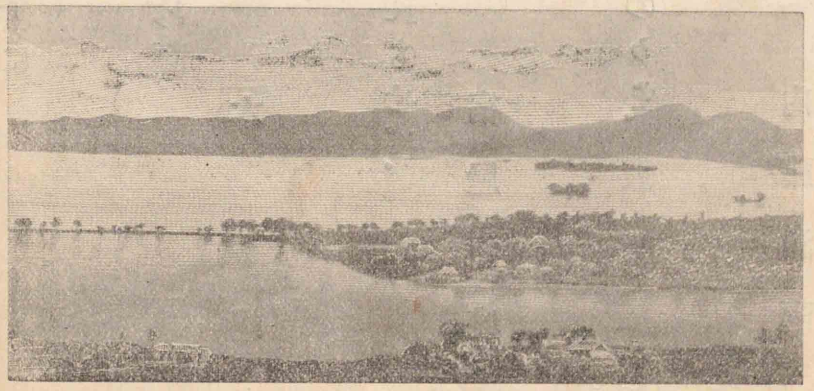
歌よみは下手こそよけれ、天地の
動き出してはさまるものかな。

二五　支那の景勝　內藤湖南

(一) 杜鵑鳴きつる方をながむれば、たゞ有明の月ぞ殘れる。

(二) 力をも入れずして天地を動かし目に見えぬ鬼神をもあはれと思はしむるは歌なり。

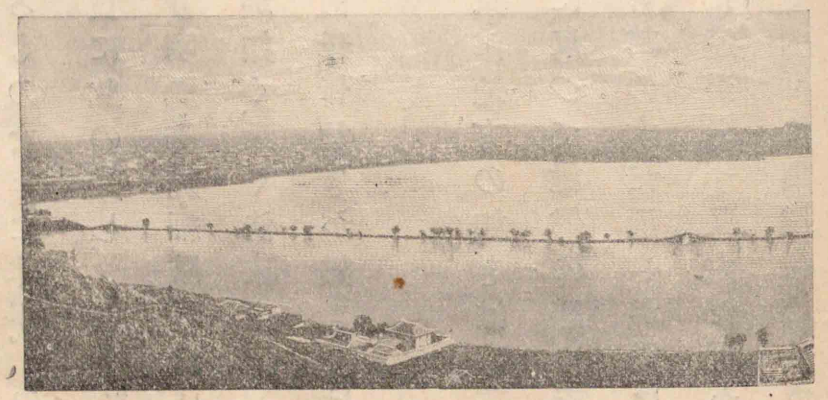
京・津地方はその趣朔漠に近く、我が邦に在りては比照すべき地なし。上海・蘇州は平野の中に在りて、猶大陸の風あり。刀根沿岸地方に類して更に宏闊を加ふ。獨り杭州地方は山迫り、海繞りて、地勢逼隘、頗る我が邦に似たり。城壁は女蘿蔓延、翠色滴らんと欲し、亦北方枯燥の比にあらず。西湖の如きは、その景致殆ど我が京畿・中國に類し、支那に在りては明媚秀麗の最たるもの。而も



西湖の風光

我が邦に比すれば、猶やゝ暗澹たるを免れず。我が瀬戸内の如き澄瑩秀朗なる風致は、支那には殆ど求め難きものなるべし。其の山は皆斷層より成り、土瘦せ、石秀づ。是、西湖の輭媚を以てすら尚然り。我が邦の如く土壌墳起して細波起伏の狀を爲し、溫粹雅麗なる山容を見ることなし。われ未だ三峽の險を溯り、劍閣の危を踏まず、未だ流沙の難を經、閩・粤の潮を觀ず。支那の風景を

(一)楊子江の上游。
(二)蜀に入る棧道。劍閣。
(三)天山地方。
(四)福建・廣東。

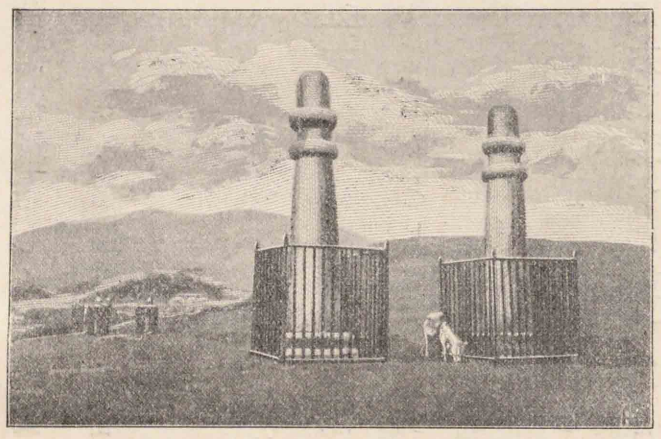


縱談するは、夏蟲の冰を語るに似たるものなきに非ず。但、其の過ぐる所に就いて、臆斷すれば、實に此の如し。要するに、其の長は莽蒼・宏豁・雄健・幽渺に在り、明麗・秀媚・細膩・委曲に在らず。之を譬ふれば、蔗稈を噉むが如く、漸く佳味に値ふ。我が國の景の、糖蜜を嘗むるが如く、齒牙皆甘きが如きにはあらざるなり。

雄大なるは、*金陵の形勝なり。蓋し京・津地方の如きは莽蒼は之あり、而も其の山太だ遠きが爲に、反つて雄偉の感に乏し。杭州の如きは明麗は之あり、而も其の太だ近きが爲に全く雄偉の趣なし。金陵の地、山太だ遠からず、又太だ近からず、蒼翠縈繞して時々其の角を缺く處、更に幽遠際なき思

*南京。

を生ぜしむ。且鍾山の如きあり、甚だ大ならざれども、而も雄特の姿に富む。野色遠近、高城百里、*孝陵廟前より朝陽門に至る高原に馬を驅れば、坐ろに千軍萬馬を馳驅して旌旗野を蔽へる古英雄を想はしむ。吾、同行の士に語つて曰く、「金陵に總督として謀叛氣の起らざる如き人物は、其の人必ず庸愚なり」と。



孝陵廟

武昌の形勝は湖廣の沃土を控へ、亦甚だ雄偉なり。然るに其の地、金陵上流の雄鎭として一

*明の太祖の廟、朱元璋

方を制馭するに宜しくして、以て帝王の州と爲すべからず。黄鶴樓址若しくは龜山の頂に登らん者は轉〻吾が言の河漢ならざるを知らん。（燕山楚水）

二六　國民の抱負

大西　祝

太古は漠たり。史筆以來世界の文明は全體上より觀察すれば、滔々として進行するなり。而して世界諸國の歴史の河流は遲速の別こそあれ、遂には世界歴史といふ一大海に朝宗する運命を有するもの〻如し。然れども世界の文明に力を致すに於ては、各國各その趣を異にせざるなし。往昔、猶太人は地上に神の王國を建つるを以てその覺悟とし、希臘人は文藝・學術を傳播するを以てその天職とし、羅馬は世界の帝王を以て自ら任じ、蠻夷の襲擊を受くる曉に於てなほ世界の女王たる位置を保ち、遂に政權を剝奪せらるゝに及んでは、法王政を建てゝ精神的帝王となり、以て世界に君臨したり。近世の英人を見るに、彼等は、己が運命は海上權を掌握し遠隔の地に植民をなすにありと信じ、米人はその國土を以てあらゆる方面に自主・自由を發達せしむる舞臺となし、獨人は科學及び政治の上より世界に一大寄與をなすを以て其の抱負となし、佛人は人間的の思想・感情を世界に廣布するを以てその任務と信じ居るなり。而して是等の國民が文明の潮流に寄與する模樣を見るに、終始間斷

なく力を致すこと甚だ稀にして、恰も流星の天に顯れて忽ち滅するが如く、極めて短き時限に於て、その國民特有の性質より斬新なる寄與をなして世界の文明を鼓舞し、一度その職分を盡し了ふればその國は疲勞衰頽して、時機再び到來し元氣恢復するまでは永く沈靜の狀態に沒するもの丶如し。

但し一方より見れば、諸國民は閒斷なく世界の潮流を潤澤すと謂ひ得ざるにあらず。然れども、最も著しく世界の文明を鼓舞し、諸國民注意の燒點となり、世界を震動風靡する國民は、一時代に於ては大抵たゞ一あるのみ。希臘の盛なるに當つてや、世界の諸國は睡眠の中にあり、羅馬起れば希臘は既に廢れたり。近世に於て佛國の驚天動地の活劇を演ずる時は、英獨後へに瞠若として退き、米國の獨立自由の旗幟を植つるに當つては、世界の諸國呆然として爲す所を知らざるもの丶如し。斯の如く世界の勢は同時に各所に發動するものにあらずして、一定時には一定所を限りてその集合點となし、この點に於て爆裂するもの丶如し。而してその破裂の餘波は數十百年に亙ることありと雖も、その破裂するは實に一刹那の閒にあり。而してこの破裂は、實にその破裂の座となりたる國土が世界文明の寄與者たる資格ある者なることを吹聽廣告するなり。

余輩近世の歷史を讀んで私に思ふ、世界の大勢が歐米の土

に破裂する時限は最早過ぎ去れるにあらざるかと。歐米諸國今日の運動は頗る盛なれど、こはむしろ過去破裂の餘勢によりて動くものにして、大勢破裂の中心點は漸く東方の國土に回轉せるにあらざるか。太古に於ては東洋の國土は實に世界大勢の破裂點となり、世界文明の潮流はその源を東洋に發したりしなり。東洋の諸國民が世界の活劇を演じ、偉大の功績を奏したる時に於て、西洋諸國民はあはれにも暗黑の裏に蠢動したりき。然れども世界大勢の轉ずる所如何ともすべからず。東洋諸國はこの勢の去ると共に漸く沈靜し、支那・印度を始め埃及・アッシリア・ペルシアの如き、皆化石の情態に陷りたるなり。而してこの間世界の陽氣は西洋暗黑の地を攪破し、希臘時代以來今日に至るまで、謂はゆる西洋の文明なるものを發生せしめたり。然れども陽氣大勢の回轉は間斷なきものにして、永く一所に止るものにあらず、今は再び東洋の國土を以てその發生地となし來るものゝ如し。我が日本の國土の如きは東西兩洋を括約する位置を占むるに、しかも古來未だかつて世界大勢の破裂する場所とならざりしは頗る怪むべき事なり。大勢破裂點は支那・印度に起り、ペルシアを經て西漸し、歐洲諸國を横ぎり、大西洋を渡り、米國に達したるなり。若しこの大勢再びその發起點に歸るべきものとせば、必ずやまづ我が日本の國土を以てその破裂點とせざるべからず。我

が日本が世界諸國民注意の燒點とならんとするの豫報は既に世界に傳播せり。日本が遠からずして世界文明の潮流に對し一大寄與をなす地位に立つべきは、火を睹るよりもなほ明白なり。」

日本は世界の文明に對し如何なる寄與をなすべきか。これは今日我が國民の覺悟によりて定まるべきものにして、寄與すべき事柄の詳細に至つては今日より之を明言し得べからずと雖も、少なくとも日本國民の特質より一種の寄與をなすに至るべきは、過去に於ける各國寄與の模樣を見て明かにこれを推すことを得るなり。何をか日本國民の特質といふ。日本國民は世界に對して如何なる抱負を有すべきか。これ今日の識者・先覺が深思熟慮すべき一大問題たり。世界の大勢は日本人をして如何なる事を世界に宣傳せしめんとするか。大勢は無聲無言なり。識者・先覺は大勢を悟了し、これをして聲あらしめ、形あらしめざるべからず。もし偉大なる先覺ありて、この大勢が言はんと欲して言ふ能はざるところを國民に宣傳するあらんか、國民の心は譬へばせかれたる水の堰を開かれたる如く、滔々たる大河となりてその進むべき所に流れ行かん。我が輩は一日千秋の思をなして、日本國民將來の覺悟抱負を宣傳する大指導者の出でん事を希望して已む能はざるなり。

然れども、我が輩姑く維新時代に立返り、當時の英雄・偉人が

思惟したる所を見るときは、其の中なほわが國民が今日の覺悟として可なるものを發見せずんばあらず。維新の俊傑多くは天下を以て自ら任じたる人なり。彼等は如何なる事を以て日本の抱負とし、如何なる事を以て日本の覺悟としたるか。彼等は大義名分を四海に布くを以て日本の抱負とし、權謀術數を去り至誠世界に立つを以て日本の覺悟とし、一視同仁に天地の大道を體し、天に代りて世界の横道を說破し、討伐し、勤誅し、萬國安全の道を示すを以て日本の天職と考へたるなり。その元氣の壯なる、人をして覺えず奮興せしむるものあり。この元氣とこの覺悟とありしが故に維新の改革は成就せられ、鎖港攘夷の陋見は打破せられたるなり。維新以來日本が駸々として進歩し、今日の如く多少の力量を有する國となりしは、實にこの元氣と覺悟とありしが故なり。我が輩は日本人にはなほ幾分の修練と困難とを經過せざれるを知る、日本人はなほ幾分の修練と困難とを經過せざれば決して大國民となる能はざるを知る。然れども、世界中において大義名分の爲に熱狂し、忠誠の爲に一身を拋つこと土芥も啻ならざる民ありとせば、何人もまづ指を日本國民に屈せざるを得ざるべし。至誠の極或は輕卒の擧動に出で大事を誤る同胞なしとすべからずと雖も、身*を殺して仁を爲すに於て極めて敏速に、死して悔なきもの、日本の人の如きは世界國民中多くあらざる所なり。日本人は道德

*子曰志士仁人無二求レ生以害レ仁。有二殺レ身以爲レ仁。

義務の念に沸騰する國民なりといふとも、誰か然らずといふものあらん。果して然らば、日本が世界の文明に對し寄與すべき最大なるものは道德上の教訓にあらざるか。日本は道德上に於て世界の師表となり、世界より私慾の氾濫を排除する一大任務を有し居るにはあらざるか。日本帝國が開闢以來絶海に孤立し、世界の腐敗の外に超越し、清潔・美麗なる風土・山川に薫化せられ、君臣・父子・夫婦・朋友の道正しく、大體上よりいへば殆ど理想的國家を經營し來りたるもの、他日大いに世界の腐敗を掃蕩するがためにはあらざるか。天下の微弱を扶持誘掖し、驕傲・無禮を掣肘壓倒し、世界の私心を根絶し、道德上の帝王となりて世界に君臨するは、日本がその特質上より世界の文明に對してなすべき最大寄與にあらざるか。我が輩は日本が天地大道の化身となりて萬國民を警醒する大抱負・大覺悟をなすべき時機の到來せるを見て欣喜措く能はざるものなり。（大西博士全集）

中學
國文教科書 卷七 終

橋岡馨所有
Hashioka

文部省檢定濟
大正元年十二月廿四日　中學校國語科教科書

明治三十九年十月十五日印刷
明治三十九年十月十八日發行
明治四十四年一月廿五日修正四版印刷
明治四十四年一月廿八日修正四版發行
明治四十五年二月廿三日修正六版印刷
明治四十五年二月廿六日修正六版發行
大正元年十二月二十日修正八版印刷
大正元年十二月廿三日修正八版發行

明治四十年一月八日訂正再版印刷
明治四十年一月十一日訂正再版發行
明治四十四年十二月十二日修正五版印刷
明治四十四年十二月十五日修正五版發行
大正元年十月二十七日修正七版印刷
大正元年十月三十日修正七版發行

中學國文教科書全拾册
定價 卷一・二 各金三拾錢
卷三至十 各金二拾五錢

著作所 吉田彌平 東京市小石川區高田老松町五十二番地

編者 吉田彌平 東京市小石川區高田老松町五十二番地

發行兼印刷者 上原才一郎 東京市神田區裏神保町六番地

發行所 光風館書店 東京市神田區裏神保町六番地 (電話本局二千三十九番 振替口座東京三二七番)

關西專賣所 大阪寶文館 大阪市東區淡路町四丁目四十二番地

本館發行の教科書は常に多數の製本準備有之候に付萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御注文被下候はゞ直ちに御送附可致候

東京秀英舍第一工場印刷